

またしても何も知らない
元スズカの同室ウマ
娘

一般通過どうした急に

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

VSしつとりウマ娘VSダークライ

→ <https://www.pixiv.net/users/40831760>

→ [pixivにも](https://syosetu.org/novel/309640/1.htm)

→ <https://syosetu.org/novel/309640/1.htm>

1

→

打ち切りルート、というよりはシリアスルート

目次

本篇

- | | | | |
|------------------|----|-------------------|----|
| やだ…私の元同室、ウザすぎ…？ | 1 | ？何言ってるの？ | 71 |
| ちよつとは笑えスペシャルウィーク | 10 | お泊りさせるときはちゃんと服を用意 | 71 |
| 締め切り近いですよ、どぼ先生 | 21 | しとけ | 82 |
| ああっ！ドーベルが死んだ！ | 29 | 幕間 生徒会のお手伝いさん | 91 |
| ギヤル語分かんないツピ… | 37 | 午前中のハイ彼女！、午後の自由人は | 98 |
| マ子にも衣裳？やかましいわ | 45 | 流石にキツイんだけど??? | 98 |
| 黒（猫）は元々幸運だっつてそれ | 53 | | |
| | | お米食べる！ | 62 |
| | | プライベートは別に決まってるじゃん | 62 |

本篇

やだ…私の元同室、ウザすぎ…？

トレセン学園、そこはウマ娘が凌ぎを削る場所。今日も勝つために各々トレーニングしている。しているはずなのだが……

「今日もスpegちゃんがつめたいよおおお」

なんだか限界オタクみたいな大声を発している赤栗毛のウマ娘。サイレンススズカ、本来であれば走ること以外は特に興味のない。最初は周りと険悪な雰囲気だったはずなのだが此処ではそんなわけではない。

いつもボケケツとしており、暇があれば走るとは変わらないが。それ以外はのほほんとしており、頼めば一緒に並走してくれる人として人気がある。面倒見も良い、だが寂しがり屋であるため一人ぼっちだと割とすぐにだめになる

そんなスズカにも後輩ができた…それがスペシャルウィーク。スペシャルウィークといえば人懐っこく、いつでも笑顔。そして素直な正統派美少女で有るのだが…有るのだが…

「…（舌打ち）」

それはあくまでもヒトミミ相手のお話、ウマソウルが強く出ているらしく。そのウマソウルがウマ娘嫌い、特に栗毛が大嫌いらしく同室として案内される時点でも大分難色を示していたのに相手が嫌いな栗毛、赤栗毛のスズカだったので超絶不機嫌である。誰に対しても威嚇する、とまでは今はいつてないようだがかなり態度は良くない…というよりは超絶塩対応である

「……………はあ」

そんな二人を眺めているのはサイレンススズカの元同室であるセルメント、何故セルメントが同室でなかったかというところ。スズカもそろそろ後輩を持ったほうが良いのではないか?という判断からである。セルメントと同室のときは

『セルメント? ご飯 ご飯?』

『はいはい…めんどくさいなあ』

お腹が空いたらスズカがセルメントにご飯を強請り

『走り込みですね…わかりm…セルメント…一緒に走りましょう!』

『ちよ、おま…引つ張るな! ああああああああ!!』

!!!!

授業終わりにトレーニングとなると、セルメントを発見するとチームの練習そつちのけで彼女を拿捕して走り込みに付き合わせるのだ、なおセルメントはチームどころかま

だトレーナーすらついていない時期から巻き込まれている。そしてそのチームに入る予定はない（それを知ったスズカにガチ泣きされてめんどくさいことがあった）

そして休日になると

『あのさスズカ……』

『……？』

『重いんだけど……』

ずーっとべったりくっついてくるのである。後ろからぐでーつとひつついてきてはナマケモノみたいに動かない。なのでそのまま動くしか無く、さりとて引きずるわけにも行かないので四苦八苦している。なおそれを見て笑ったゴルシはダートに埋められていた

『笑っていいタイミングじゃなかったみたいだぜ』：なんてことを言いつつ回転しながらダートから出てきたゴルシは遠い目をしていた

流石に自堕落極まるということで、スズカとセルメントは引き離されることになった。勿論スズカは猛抗議したが後輩できるぞといったらそっちの方に意識を取られて承認された

とまあそんな感じで悠々自適にスズカの同室から抜け出せた元スズカの同室ウマ娘のお話である

——朝、すがすがしい朝である。あのクソ煩いやつが居なくなったというだけなのに新天地に来たような感覚に襲われるのだ。適当にシャワーを浴びて制服に着替えていざ学園へ

そう行きたかったのだが……

「うっぜ……」

L A N Eにとんでもない通知が来ている、大体はスズカなのだ。あれあれがどうだとかこうだとか、まあいつものことなんだが。スペシャルウィークが来てからはどうやっても塩対応しかしてくれないという嘆きと撃沈された報告である。いやあいつ栗毛嫌いだしなんならウマ娘自体嫌いじゃん…なんてことを思いつつ目を滑らせていく

私の同期は、サイレンススズカ、タイキシヤトル、マチカネフクキタル、メジロドール、シーキングザパールだ…スズカだけでも過食気味なのにほかも酷いというか。非常に疲れる面々しか居ない、ドール居なかつたら早々に退学してたか時期無理やりずらしてたと思う。

タイキシヤトルはB B Qのお誘い、朝から早いよと返信。フクキタルはL A N Eでも煩いのでシンプルに煩いと送っておく。パールは…うん、世界レベルの話題過ぎてついていけないんだけどこれ。ドールからは大丈夫？つて来てた。お前しかセーフティラインが居ねえ…私も後輩ほしいな……

なーんて思っていると。ピコンって通知音になる。まさかまさかのスペシャルウィークからだ

『時間ありますか』

とめつちや短文かつ事務的な話し方してくる。まあスペシャルウィークなら仕方ないか、なんて思いつつ指を動かす

『ん？後輩か。有るよ、トレーニング終わりでもいい？』

『お願いします』

『場所は？』

『人に見られたくないので』

『じゃ、私の部屋ね』

『はい』

なんていうそつけない会話で終わる、悪いやつではないんだよなスペシャルウィーク、煙たがれることも多いけど。まあ分からんでもないし

そのまま登校して、適当に授業を受けた。煩い連中のことを適当にいなしたり、スズカとフクキタルにアイアンクローしかけて大人しくさせて。パールのデイス地球されたあとにドーベルに背中を擦られた。ありがとよドーベル…まだ戦えるかもしれない

……

なんてことをして。すっかりトレーニング。私も優秀な方なのでそつなくこなしておく、まだトレーナーついてないけどね。スズカとタイキはリギルというチームにはいつてるらしい、あんま興味ないから良いけど

そんなこんなでそろそろスペシャルウィークが来る頃合いである

『……来ました』

「ん、いらつしやい後輩」

ドアを開けてスペシャルウィークを迎え入れる。相変わらずぶきつちよな顔だけど、笑うと可愛いんだよねこいつ。性格も、私としては嫌いじゃないよ。嫌なもんは嫌なんだし

「で、どうした？ウマ娘の私に頼るなんて珍しいじゃん」

世間話なんてもんは相手は望んでないだろうから、椅子に座らせて話を聞く体勢に。珈琲とか飲む口じゃないだろうから適当にジュースとお菓子を置いておく

「……………」

「スズカ絡み？」

喋らないスペシャルウィークに尋ねると軽く首を動かした。別に無理して喋ろなんて言うつもりもないよ私は、嫌な奴に相談してくるなんて苦痛だろうし…それに、スズカで苦労させられてと言うなら他人事じゃないから

「…何された？」

「…ダル絡みを」

「OK、それ以上は言わなくていい」

だる絡みの一言ですべてを察する。いや私と同じようにしちやあかんでしょ。ただでさえ苦手なものにはや嫌いになってんじゃん完全に

「いつも、ああなんですか？あのダメウマ娘」

「ダメウマ娘」

「人のテリトリーに土足で踏み込んでくる輩をそう呼んでもなにか問題でも？」

「アツハイ」

「なんだか分からないですけど。変に絡んでくるし、煩いし、朝から走ろうと誘ってくるし、一人の時間確保しづらいと思えば変に距離作るし。離れたと思えばベツタリしてくるからめんどくさいんです」

溜まってんなー……と思いつつスペシャルウィークの愚痴を聞いてやる、これぐらいは後輩なんだからいいっしょ。実際嫌な先輩にだる絡みとか報復されても文句言えんだらうし

「あと勝手に名前短縮して呼んでくるのどうにかありませんか？凄く不快なんですけど

…」

「あー……馴れ馴れしいってこと？」

「馴れ馴れしいのは最初からなので、あきらめてます……その」

めっちゃ嫌そうな顔しつつ、歯切れの悪い言葉に時間かけていっていいよ。っていうジェスチャーしながら次の言葉を待ってあげる。ゆっくりでいいんだからね後輩

そこからしばらくした後

「おかあちゃんが、そう呼んでくれたので……」

ボソボソって話し始める。自分の生みの親は自分が生まれてすぐに亡くなってしまったこと、育ての親はヒトミミだったこと、自分の周りにウマ娘が居なかったこと。育ての親と自分が違うところに孤独を感じたこと、だから自分はヒトミミだと思いたいけどそうはなれないからウマ娘が好きになれないこと

「……大事な。名前なんだね」

「……死んだ母親との、唯一の繋がりなので」

ゆっくり時間をかけてスペシャルウィークは話してくれた。んまあ……それなら確かにヒトミミのほうに愛想が良くなるのも分からんでもないな。ウマ娘に対してもそういう態度取っちゃうのも仕方ない、周りは仲間が居たっていうのも大きいんだろうし「すみません、つまらないお話を」

「いいよ、話してスッキリしたかい？」

「……………はい」

若干うなだれるようにしているスペシャルウィークに苦笑する、ほんとはもうちよいまともに接したいんだらうけど。反射的にそうなってしまっただらうなっていうのが理解できるから、まあそこは飲み込んでやらんとね

ま、これからどうなるかねえ

ちよつとは笑えスペシャルウィーク

スペシャルと話した次の日からちよつとだけ日常が変わった。私の部屋にちよこちよこスペシャルが居るようになったのだ、まあその辺りは特段どうでも良かったりする。あの子の好きなようにすればいいさ。

だいたい来るのは昼時、授業が終わった後だったりする、カフェテリアで御飯食べるのが大体の流れなんだけど、本人は周りとは話しなきゃいけないような空気と。量を食べたくても食べられないジレンマでストレスになるっぽい

そんなわけで今日も昼時に私の部屋に来た

「…お邪魔します」

「あいよ」

そそくさと部屋に隠れるように入ってくるスペシャルに視線をよこさないまま返事をする。別に気にする必要もないのだが、本人が嫌らしい。特にスズカ絡みで、あいつどんだけ嫌われることしてんねん

「毎回思うんだけど。それだと足りなくない？」

黙々と口を動かしてるスペシャルに視線を向けつつ問いかける、ヒトミミの成人男性

よりも遥かに食べるウマ娘にしては、かなり少ない。というか女子高生が食べるのより少ないかも？

「お腹は、空きます。けど…」

「沢山食べるのがウマ娘っぽくて嫌？」

「……はい」

うーん、精神的な問題だからねえ。会長サマやタマモクロス先輩とかは元々食が細いタイプなんだけど。この子はそうじゃないだろうしなあ

「でも倒れたりしたら私心配なんだけど」

そう言うときスペシャルはわかりやすく尻尾を垂らしてうなだれる

言われたくないだろうけど言わなきゃだめなんだよー、ごめんよスペシャル

「ごめん、なさい」

「あい、というわけで食え」

ドンってスペシャルの前にお重を叩きつける、何だよその顔は。私がスズカにどれだけ手を焼かされてると思ってるんだ。朝の走り込みで朝ご飯食いそびれてハラヘツターしてくるスズカの腹を満たしてきた私がお重ぐらい作れないとも思ってるのか

「あの」

「良いから黙って食べる後輩」

「ええと」

「さっきのごめんなさいは嘘？」

「違い、ます」

「でしょ？…：しようがないなあ」

なんだかしどろもどろになってるのでじーっと見ながら頬を突つつくと視線を逸らすので強制拿捕。暴れても離さないからなスペシャルよ。膝上に乗せて腕回して逃げられないようにしつつ、口元に卵焼き持つてく。

「ほれ」

「頂きます…」

観念したように口を開けてパクつと食べてムグムグと口を動かす、こうやってるとただのウマ娘ただけどなあスペシャルよ。どうして普段はあんなに無愛想なんだお前は。ヒトミミは普通とか言ってたのになんだかヒトミミすら避けてるらしいじゃんよ

「もつと口開けて」

「ん」

ムグムグとして飲み込んだのを見計らってご飯を食べさせていく、なんとというか餌付けしてる感覚に襲われるけど実際やってることはそういうことなんだから仕方ない。食べさせれば黙って食べる辺り本来素行は良いんだろうさ。そんなこんなで十数分ひ

たすら空いた口にご飯放り投げる作業を続ける。不味いとは言われてないので味は大丈夫だろう。

「ん」

次のやつ放り込もうとしたらもう空っぽになってた。すげえ食うなお前、一応念の為に4段作ってきたんだけど全部入っちゃった、本来の食欲がこれだとすると普段食べてたのは1割にも満たないかもしれないな。なんて思っているとスペシャルの口は空いたままだった、なんだお前まだ食い足りないのか食いしん坊

「もう無いぞ」

「!?!」

そういうとスペシャルはびっくりする、そりやあんだけあったのに無くなるとは思わんよな。口拭きでゴシゴシとスペシャルの口元を綺麗にしてやる、こういうときは決まっておとなしいのでやりやすい。どっかの赤栗毛はイヤイヤしたのにこいつは偉いなあ。

なんて思えば自然と手が頭に伸びていた。軽く触ると

「っ!?!」

めっちゃびっくりされた、あー。ごめんよスペシャル、びっくりさせるつもりはなかったんだ。ただ手癖っていうのはなかなか直らないものでな。たまにドーベルに

やってるんだが、それが出てしまったらしい

「あー……ごめん、後輩」

流石にびつくりしてたから仕方ないと思って手をどかそうとすると

「……………」

「んー……………」

なんかスペシャルの方から恐る恐る、私の手に頭を触れさせてくる。そのたびにビクビクツツとなってるのを見ると私が悪い事してるみたいで嫌なんだがスペシャルよ

「あー……後輩？」

後輩って呼んでも返事しない、それどころか尻尾でペシペシって体叩いてくる、もしかして呼び方が気に入らないのかもしれない？まあ後輩呼びだと誰のことか把握できないからだろうけど。

「……………スペシャルウィーク？」

ベジベジ!!

そうじゃねえだろと言わんばかりにもっと強烈に叩いてくる、そんなに叩くんじやないよスペシャル……んー

「じゃあ………スペシャル？」

ペシペシ

どうやら正解に近づいたらしい、まああれは呼べないだろうから。別の呼び方なんだろうけど。スペシャルの次かあ……うーん

「そうか、スペシャル後輩！」

合体させればいいじゃん、私天才か？

ガブっ!!

「いっつっつて?!?!」

コイツ先輩の腕噛みやがったぞ?!?!?!?! お前結構野生児なのかスペシャル?!?!?! なんて脳がバ

グっていれば、噛んだところチロ!チロ! 舐めてくる。なんだこのコミュニケーショ

ン

ってなると一つしか無いじゃん

「……スぺ？」

「……ん」

そう呼ぶと体の力を抜いたスペシャル……いやスぺがもたれかかってくる。それってお前の親が呼んでた名前じゃないの？ 大事なんじゃないの？ うーん分からん。別に私が特段なにかしたわけじゃないなあ。

ただスズカに拳骨入れつつ、なんか居づらそうだったから適当に時間が有る時に絡み

に行ったり。一緒に飯食ったりしただけなんだけどな、全然大したことしてないし。それはスズカとか。同期の連中とか、後もう…二人か。二人だな、あのイギリスV S アメリカみたいなやつしてるの。そいつらにも同じことしてるんだがな

そんなこんなしているとスヤスヤとスpegが眠りにつく。寝てる顔は死ぬほど可愛いスpeg、眉間のシワが取れてあどけない顔をしている、というか普通にしてれば正統派美少女だよなあスpeg。

「ゆっくりおやすみ」

そんなこんなでその日は終わった、その後数十分どころか数時間寝ちゃったので仕方がなくスpegを私の部屋の空いてるベッドに寝かしつける。寮長には事情を説明してある、まあ事情が事情だからしかたないっしょ。外泊でもないんだし

やることやって、明日の準備整えて。んでスpegの頭軽く撫でてから自分のベッドにはいつて眠りにつく

「んにゅ………」

——はずだったんだけどなあ

なんかいつの間にか背後から気配感じるなど思ったらスペが私のベッドの方に入ってきてた、まじでいつ来たんだお前は。追い出すわけにもいかなから適当に放置しとく
「ん……………う……………」

そうしてるとスペのやつがめっちゃ抱きついて来る、なんなら頼ずりしてくる。どんだけスキンシップ過多なんだ……いや、違うか。今まで寂しかったんだろうか、緊張の糸が切れた反動なのかもしれない。そんなことを思いつつスペの方を向いておく
「……………」

ぎゅって寝間着の裾握りしめて寝てたので此方から軽く抱き寄せるとなんかしがつかれる。ウマ娘パワーでしがみつかれると流石に私も痛いんだがスペペペペ

なんて思いつつも好きにさせてやる、寂しさから来るもんだろうし。ま、明日朝起きたら離れてるべ

——翌朝

そんなことを思つてるときもありました、なんて言わんばかりにスペは引つ付いて離れないまま眠りについている。何回か名前呼んだりほつぺた突ついても無反応。

このまま登校するわけにも行かないので寮長に電話しとくか

『やあ、おはようポニーちゃん、朝からラブコールかい？』

『おはようございます、フジキセキ寮長。残念ながらラブコールではありません。スペシャルウィークの件でご相談が』

フジキセキ寮長、なんというかこう。あんまり得意じゃない。ムーヴ的な意味で、ペース吞まれるからあまり会話はしたくないんだけどスペのためだから仕方ない

『ああ、彼女か。どうだった様子は？落ち着いてるかい？』

『落ち着き過ぎて今も夢の中ですよ』

『おや、それはいけない』

ハハハと笑うフジキセキ寮長に若干の気疲れを感じる、朝からテンション高いなあ。なんて思っていると、挨拶も程々にというふうに着長が切り出してくる

『その様子だと、ポニーちゃんは可愛い後輩の面倒を見るので手一杯、といったところかな？』

『ええ、まあ』

『分かった。私の方から伝えておくよ、彼女は少々事例として特殊さ。これぐらいは便宜をあげないとね』

『ありがとうございます』

『代わりになんだけど、後で私とも遊んでくれないかな？ポニーちゃん♪』

『気が向いたら、ですね』

『これは手厳しい……では、今日は一日かけて後輩の面倒を見ておやり』
『はい』

そう言つて電話を切る、次の電話かけないと

『もしもし……朝から電話とは、珍しいなセルメント』

『ちよつと事情があるからね。エアグルーヴ』

電話をかけた先はエアグルーヴだ、私が登校しないと。あのバカどもが変なことを起こしかねんのだ。特にスズカ、スぺも部屋に帰つてきてないからおそらく絶対めんどくさい状況になつてはるはず。軽くエアグルーヴに事情を話しつつ、服を引っ張つてくるスぺをあやして安心させておく

『なるほど、後輩の面倒を見るために欠席か』

『申し訳ない』

『いや、寮長からも伝達済みな案件だ。仕方がないだろう、此方のことは任せておけ』

『ありがと、後で生徒会の仕事手伝うよ』

『悪いな』

『困つたときはお互い様ということ、一つ』

『了解した。ではな』

よーし、これでとりあえずは良いかな。

さて、
スペと今日は一日のんびり過ごさかあ

締め切り近いですよ、どぼ先生

さーで、合法的では有るがサボることになったのでとりあえず部屋から出ることはあんまりよろしくないかな。なんてことをスベの頭を撫でながら考える。うーん、暇なのはこの際しようがないかもしれないな、まだ起きないし

「……………」

規則正しいタイミングで寝息を吐くスベのことを見ながら…予定でも考えておく、何も考えつかないけど。

「ん……んん」

しばらくぼーつとしてるとスベが起きた、目をゴシゴシしながら同じようにボーツとした顔で此方を見つめてくる

「おはよう、ごさいます……？」

「おはよスベ」

スベが起きた後、めっちゃ謝ってきた。流石にまる半日寝てるとは思わんかったらしい。私もそう思うけど、気疲れしてたんじやない？つて言うと言線そらした。

「あのあk……いえ、あの人と一緒だと疲れます」

「分かる」

スズカと一緒にだめんどくさいよなー、なんて軽口叩きつつ朝の準備する。とりあえずスベを風呂に入れ終わったので髪を今梳かしてる、サラサラだわコイツの髪

「……………」

髪を梳かしてやってるとまたうつらうつらしてスベが眠りに落ちかけている。コイツもしかして、最近どころか此処に来てからちゃんと思えてないんじゃないか？うーむ…スズカの部屋に置いといて良いもんだろうか

いや、私の部屋に置いとくとなんか自立しなさそうな気配有るんだよなスベも

「おーいスベー?」

頬を突っついてやると突っついた指に頬ずりしてくる。コイツ愛玩動物か何かか??ほんと、他のやつにもこういう風…には無理だろうけど。ある程度愛想よくしてくれると先輩は嬉しいのだが

「御飯食べるぞー?」

ツンツンって突っついててもまた寝ちゃってる。仕方ないので膝上に乗っけながらお腹撫でてあやしておく。なんかこうされるのが好きっぽい、猫かなんかか?

そんでしばらくまた暇な時間、起こすわけにもいかなのでPCに電源を入れて軽くネットでも見てるか

なーんてことしてたら昼過ぎ、まじでスペのやつ起きないんだけど。一瞬死んでる？
と思っただけど口元に指近づけたら舐めて来たからそういうわけじゃないらしい

「そろそろマジで起きるぞスペー?!」

the、無反応。爆睡どころか昏睡状態だよもはや、なんて思っているとコンコンって部屋のドアがノックされる。誰だろうか、エアグルーヴなら来る前に連絡入れてくるから違う。スズカならもつとドンドンって叩いてくる。フクキタルとタイキはこの時点で煩いので論外、パールは違うかな。ドア越しでも出てくるオーラが違う

ってなると一人か

『あ、アタシ』

やっぱお前だったかダブル。ちよいと待ちや、スペを起こさないようによかしつつドアを開ける。ほかの奴はまあダブルなら連れてこないだろうから安心だわな。

「どしたんダブル？寂しくなった？」

「そういうわけじゃないけど…これ、どうぞ」

そう言いつつ差し出してきたのはお弁当である、朝食分は確保してたけど昼食分は確保できてないのでありがたい

「うい、あんがと」

「…その子？後輩」

貰った弁当箱（ウマ娘基準）を机に置きながらドーベルがスペのことちよつと離れながら見てる、こいつも人見知りといえど人見知りだから仕方ない。だけど私が構ってるから気になるみたい

「ん、スペシャルウィークっていう子。根はいい子なんだけどな、ちよつと他のウマ娘好きじゃないらしい。露骨に周りとの距離取ってるらしいからどうにかしたいんだけどね」
「そう……」

ゆつくりスペのこと撫で回しながらそう言うとなんかドーベルがつまんなそうな顔してる、いやコイツは後輩なんで……そういうことしても大丈夫だろ

「ドーベルもまたしてほしいの？」

「違うから……!?!」

否定するドーベルのことうりうりつて撫で回す。目を白黒させるけど逃げないんだよな、というかたまにされに来るし。お前は犬か

「んんっ……!?!」

変な声を出す変な声を、私が変なことしてる感じになってるじゃん。まあ良いんだけどさ。そんな風にドーベルとじゃれてるとスペがモゾモゾって起きる

「おはよスペ、お寝坊さんだぞ?」

「おはよう、(ぎ)ごいませ……」

ゴシゴシって二度寝から目を覚ましたスベが体を起こしつつ、ドーベルの存在に気がつくと……………

すすすす……………ポフツ!

「ぐえっ」

背後に隠れて毛布にくるまりつつ、ドスドスってなんでコイツ居るんだよっていうように背中叩いてくる。あんまり邪険にするなスベペペペ痛いんだけどお!!

また噛み付いてくる、なんでそんなに怒ってるんだスベえ!!

「…はあ」

なんでドーベルまでため息なんだか????やるか????お前を黙らせるなんて簡単だぞ!!!!????

「…私のこと、その子に教えたりした?」

あつ……………してねえわ……………これは凡ミスだわ。忸怩たる思いでこめかみ抑えてるとまたドーベルのため息つかれる。おう、あんまりため息つくとお前の絵本ばらまくぞ

「あー……………スベ、コイツはメジロドーベル。メジロ家のご令嬢サマだ」

「ご令嬢サマってところに含み持たせないで」

「ま、こんなツンツンしてるけど良いやつだよ。お前と似てる所あるしな?」

軽口叩きながらセルメントとドーベルがお互いの気安い会話をすれば、ほんの少しだがスペシャルウィークが毛布の隙間から視線をのぞかせる

「お前は根本的にウマ娘そのものが苦手で、コイツは見知ったやつ以外が苦手。特に男な、ある程度人目には慣れてきてるところだけど。まだまだって感じ」

「概ね、あつてるわ」

「実はドーベル、今もちよつと怖いだろ？」

「……そんなことないケド」

「目を見て言え目を見て」

視線をガン反らししながら会話するドーベルのほつぺたを突つつきながら問いかける、目を見て言えよドーベルよ

「ま、こういう感じだから。あんまり警戒しなくていいよ、コイツには人のデリケートな領域には踏み込まないし踏み込めない臆病なベルちゃんだからな」

「ベルちゃん呼びはやめてっば……！」

「じゃあしつかりドーベルが自己紹介しなさいよ」

「……わ、分かったわよ」

こうやってお膳立てしてやれば勢いでなんとかなるだろドーベル、頑張つてちゃんと自己紹介しろ

「………ええと、メジロドーベル………です、ヨロシク………」

「片言の外国人じゃねーか。あとちゃんともうちよいちちゃんと言え」

「むぐぐ」

さっきの威勢はどうしたんだ???\nんんん???

てな感じで絡んでるといつの間にかスペが顔を出してドーベルと私の会話を聞いていた。なんとなくだけど、ドーベルのことは大丈夫そうだな

「大丈夫そう? スペ」

「……………」

視線をスペに視線を向けるとドーベルをじーつと見ながら無言で居る、その様子にドーベルは何がなんだか分からなくてたじろぐ

「ええと……………何?」

「……………マジロドーベルさんって」

不意に口を開いたスペから放たれる言葉にドーベルは悶絶することになる

「セルメントさんの後輩なんですか?」

「ぶっ」

「な、なんでそうなるの…!?!」

ダメだ、我慢できない。くっそウケる、ドーベルのやつ。スペに自分と同学年か後輩かと思われてやがる!!

「いえ……………その、なんというかこう……………」

「いいよスぺ、言ってやれ言ってやれ」

「な、なんとというか……?」

歯切れの悪いスぺに発言を促す、ドーベルがなんか顔を引き攣らせるけど構わず言っ
てやればいいさ。コイツ、もうちよいちちゃんと絡めるようにしないとな

だが、私は忘れていた。コイツの根底にあるのは

「威厳、無いですよね。私よりコミュニケーション下手くそですし」

根っからのウマ娘近寄んじやねえよバーカソウルだったことを

!!!!!!

ああっ！ドーベルが死んだ！

「い、威厳がない…？」

スぺのあまりの言葉にドーベルのやつが固まってる、いや私も固まってるんだけど言われた当人は私以上の衝撃を受けているだろう。だって…ねえ？威厳がないだもん

……

「あ、いえ。思ったことを言ってしまっただけです」

ンンンンそつちのほうが余計にダメージはいるぞスぺエ!!!ほら！ドーベル完全に固

まっちゃったじゃん!!!

「す、スぺ？流石にそれは……」

「でも赤栗毛はそれで喜んでましたよ？『それって親しみがあるってことよね!』って」

「スズカア!!何やってたんだお前エ!!!」

余計なことを吹き込んでんじゃねーよ馬鹿!!!どう考えてもそれは親しみじゃなくて

舐められてる証拠なんだよ!!!お前はそもそもまともに会話してもらえないからバグってるだけなんだよ!!!後輩に変な知識与えんな!!!そんなんだから他のやつから

『並走以外はちよつと……!』

!!!!! まだスズカに後輩は早かったかもしれん…被害が大きすぎる

「やっぱり駄目でしたか?」

やっぱり!?! やっぱりつてお前自覚有るのか!! いたずらっ子かお前も!?

「……」

視線を逸らすんじゃない!!! 面がいいからつてなんでも許してもらえと思うなよ!! と心のなかでさげびながらグリグリとほつぺたを突つつく、なんだか嬉しそうなスペ。なんでだよお!?

「……」

あ、ドーベル。exeが復帰した。多分ブルスクにでもなつてたんだろな、誰だよ内部掃除怠つたの

「……ふーん」

なんでそこでお前が機嫌悪くなるんだドベエ!?! 私の胃を破壊しようとするな!?! あれか? 前にプリファイの映画に付き合った後にお前欲しいだろつて入場プレゼント押し付けたのがそんなに嫌だったんか!?!

「ナカガイイノネ」

カトコトは怖いからヤメロツテ!!! そしてスぺもなんか変に勝ち誇つた顔をするん

じゃないよバカタレ！軽く拳骨落としてやるとドヤ顔辞めてくれた

一気に疲れたわ……………

「…………でも、スズカはそれで喜ぶのどうかと思うわ」

「ご尤もだドーベル、私もそう思う。誰だつてそう思うと思うんだよ、後輩だしなスズカは」

「やっぱり、あの赤栗毛つておかしいですか…？」

「スズの言葉に思わずドーベルと視線を合わせる。まあはつきり言ってもいいだろう、スズカだし」

「並走馬鹿、これに尽きる。朝早いし、割と生活能力無いしな。あと並走馬鹿」

「まあ、そうね…悪い子では無いんだろうけど。その、距離感は少しおかしいかも。並走馬鹿なのは同じく」

「私は無然とした表情で、ドーベルは少し困り顔で。なにげにドーベルも並走に巻き込まれることが有る。というか巻き込まれに来るという方が正しいと思うんだが。」

「誰にでもそうなんですか？」

「大体は誰にでもそう。面倒くさい成分は私（セルメント）に対してがほとんど」

「異口同音の言葉にスズはなにか考えたように自分のウマホを取り出し。LANEの

画面を出してきた

「私のLANEのIDです、その。愚痴があればどうぞ……」

コイツなりに心配してくれるらしい、スペはなついた相手にはそれなりにちゃんと話せるんだなやっぱり

「私も、良いの?」

というかドーベル用に出してるんだしなこれ、私は前から教えてもらってる。元同室だからスズカ対策用に最初からね

「…あの赤栗毛に苦労させられてそうなので」

なんとも言えない表情になるドーベル、まあ初対面としての繋がりがこんなんだつたらちよつとあれだわな。それはそれとして交換はするみたいだけど。

そんな微妙な雰囲気の中でスペの腹の虫が盛大に鳴り響く。スペはめっちゃ恥ずかしそうにしてるけど。まあお前あれからご飯食べてねえしな

「飯にするか、一杯あるし。ドーベルもまだだよな?」

「うん、まだ」

「なら決まり、スペもそれでいい?」

スペに問いかけるとドーベルの方を見て頷く、どうやらスペの中でドーベルはイケる判定貰ったらしい。栗毛じゃないのもなんとなく要素は有るんだろう

「頂きます」

「頂きます…」

「頂きます」

ムグムグと三人で朝飯＋ドーベルのお弁当を突つつく。ドーベルの弁当美味しいんだよな、スぺももきゅもきゅって大人しく食べてるし

そんなこんなですっかり日が傾く三時になってしまう。まじで時間すぎるの早すぎでは？そんなことを思っているとまたスぺがお昼寝してしまう

スヤスヤって寝てるスぺはやっぱ可愛いのである。

「そーいやドーベルはトレーニング良いのかい？」

「今日は休みなさいって言われた」

「ドーベルも追い込み癖あるからなあ」

自分が弱いからってオーバーワーク連発してた時期もそれなりにあった。まあ私がドーベルのチーフトレーナーに頼まれてセーブするようになったんだが

「ほれ、ドーベル。マッサージするよ」

「ん…」

スぺは私の首に腕を回しておぶられながら寝ている。これが一番安心するんだと。そういうことだから前の方は開いてる、なのでマッサージでもしてやることにする

「大分無理してるなお前、こりや休めって言われるよ。筋肉の疲労具合もだけど、骨へのダメージも無いわけじゃないからな。過度なトレーニングで強くなれるわけじゃないんだドーベル」

「……ごめん」

「適宜休憩を取ってしつかり休むときは休む。いいな?」

「分かった、ちゃんと休むから」

小言を言えばしよんぼりドーベルになる、まあ愛のムチだと思ってくれ。オーバーワークで強くなれるんだったら誰も苦労なんてしないんだよ

「チーフトレーナーに迷惑はかけられないでしょ?」

「トレーナーには、心配されたくない」

ドーベルのところのチーフトレーナー。結構いい年してるからな、トレーナー業いつまで続けられるか分からないんだ。心労はかけるもんじゃないよ

「だろ? じゃあちゃんと行程表守れ。エアグルーヴも心配してるんだからな」

「うっ……」

エアグルーヴの名前出せばだいたいコイツは大人しくなる、ティアラ路線行くなら間違いないぶち当たる壁だろうし、慕ってるからな。その人には迷惑かけようだなんて思うほどドーベルは嫌なやつじゃないから成り立つてることも有る

「ほい、足のマッサージ終わり。次肩と腕な」

「うん」

言われたとおり素直にほふつと背中を向けてくるドーベル。素直な状態だとだいぶ扱いやすいんだが……まあコイツはいつか

「ちよつと、痛いかも……」

「お前。相当疲れてるな……」

軽く付け根を指圧されるだけで痛がるつてことは重症だよこれ。入念に時間かけてマッサージしてやるか、起こさないように時折スペを撫でて睡眠時間延長も忘れないでおこう

「絵を書くのも休み休みな？」

「分かっている」

「後で手伝うよ、絵本作り」

そういうとぱったぱたと尻尾を振っている、それが息抜きなるからそれで良いんだよドーベル。変な趣味じゃないんだしき

そこからしばらくマッサージするとドーベルも寝ちまった。仕方ないのでエアグルーヴ召喚

「ドーベルも寝てしまっているのか？」

「まあ日頃の疲れってやつかも」

「あまり、無理はしてほしくないのだがな」

ドーベルを迎えに来たエアグルーヴにドーベルを預けながらそんな言葉を交わす。コイツはそういうこと言ってもやるときはやらかすからしようがない

「すまないな、セルメント。後輩の相手をしていた途中だろうに」

「いいよ、ついでついで」

ケラケラ笑つてるとポフポフって撫でてくる、だから別に気にしてないってば。とは言うもののエアグルーヴはエアグルーヴでちよつと溜め込むタイプだから好きにさせておく。んで満足したら帰っていった

エアグルーヴの匂いが残ってたのかこの後めちやくちやスペペペペペペに噛まれた。いたいんだけど

ギヤル語分かんないツピ…

「はー、つつかれた」

スペをスズカの部屋に押し返してぐったり、部屋に入るのけ者やだやだしたスズカを宥めつつスペを部屋に返したんだよね。まあスペの方がやだやだしてたけどまあ仕方ないんじゃないかね、明日は休みだから暇なのだがそこはそれ、これはこれである。ある程度休んだらPCのあるデスクに向かう、まあ軽い暇つぶしのようなものである。ヘッドセットを繋げて。これでいいかな、気分転換にちよつくら話すでもしようかね

『こんばんはー』

軽くとりあえず挨拶しておく、挨拶は大事だからな

『おう、セルメント。こんばんわ、なんか後輩のおもりして任されたんやって？大変やなー』

『おもり？ああ……なんだっけ？スペシャルウィークだっけ？アタシも噂では聞いてる』

相手はタマモクロス先輩とゴールドシチーだ。タマ先輩は芦毛つながりで、シチーと

はなんとというか、割と不思議な出会いで色々と会話することになった。

『噂やとんやえらい気性難っちゅう話やけど、ほんま?』

『ええ、まあ。そんな感じですよ』

『つてことは、アタシ以上に……つてことね、ご愁傷さま』

お前も難儀やな一つて慰めてくれるタマ先輩と、想像して若干萎えてるシチー。シチーは自分の気性難な部分に少し辟易しつつもどうしようもないと割り切ってる部分はある。まあすぐに治るなら気性難とは言われないわけだからしゃーない

『でも気性難つて色々ありそうだけど。どういう感じ?言うこと効かないとか、気分の浮き沈み激しいとか?』

『んー、セルメントが手を焼くレベルっちゅうなら、そんじよそこらのきかん坊とは訳が違いそうやなあ』

『そうですね。はい……ええと、ウマ娘そのものが大分苦手なようで……』

そう言うのと二人の言葉が途切れる、まあ多分絶句してるんだらうよ。そりやそうだな、私も聞いたことねえもん、基本ウマ娘は本当の意味で孤独が苦手だ、ある程度群れなきや生きていけないらしい。そういう意味でもだいたい異質な方だ

『セルメント、ねえそれレースとか大丈夫?かなり扱いに困りそうだけど……』

『今ん所レースの方はなんとかなってるみたいだね、ただ模擬だからっていうのは有る

かも。本番とかはちよつときつそう』

『日常生活すらままなつてないやろな。相方の方も……まあ当てにならんやろうし』

『同室の子は……あー……スズカ』

『当てにならん、いやマジで』

なんていう会話を数十分続けて通話を終わる、シチーもタマ先輩もそれなりに心配してくれるみたいで申し訳なく思う、ありがたい限りだ。そんな風にして今日はこのまま寝ちまうことにしよ

「思いの外寝れなかった」

ベッドから起き上がりつつそんなことを思いながら体を動かして行く、休日とはいえ。まあだらけすぎるのも良くないのは間違いないからである

まあ、今日はのんびり……と思つてたらLANEの通知、うーん誰だろうか。そう思つて開くとシチーからだつた

『今日暇?』

『やることは特に無いけど、どした?』

シチーからの誘いは割と珍しい、モデルやつてるから仕事とかで忙しいのもあつてなかなか会うことも少ない。昨日の会話ぐらいかね。出来るのは

『ちよつと気分転換しない? アタシもちよつとストレス厳しいし』

『そういう事ならいいけど、他に誰か誘う?』

『そうだね、誰か誘うか。んー、ジョーダンとか?あ、でもセルメントはジョーダンと初対面じゃなかったっけ』

『いんや?LANE知ってるよ』

『マジ?』

『マジ、ちよいまちや』

ウマホ操作して、これをこうしてつと

『おお?なんか追加された、いきなりどうしたし』

ジョーダンを加えて3人で会話したほうが速いだろ、あいつアホの子だから伝言ゲームするとおかしなことになりかねないから。まあこっちの方が楽でいいだろ

『うい、ジョーダン』

『あ、セルメントか。いきなり過ぎてちよいビビったんだけど?』

『おはよ』

『あれ、シチー?????どうい組み合わせ?ちよいキャパ超えてる』

『ちよつとね、そういうジョーダンもセルメントと知り合いつてアタシ知らなかったし』

『あれ?そだつけ、言うの忘れてた。メンゴ』

『ま。イイケド、付き合いかもアルダロウシ』

『いきなりカタコトになってどうしたん？変換ミス？』

『そゆことにしとけ』

『?????』

レスが、レスが速い！ギャル特有のタイピングスピードっていうやつなのかこれは。私はPC派だからスマホはちよつと打ちづらいんだよね、反応ちよつと遅いし。単純に指が痛くなりやすいっていうのもなくもないんだけど

『そういうシチーこそセルメントとどやって知り合つたん？想像つかん』

『色々』

『逃げんなし？』

『べ、別になんかあつたわけじゃないから。ちよつと仕事のことです』

『ふーん……?』

『な、何』

『ベツニナンデモナイケド』

『そつちもカタコトじゃん！』

『シチーだつてそうだったじゃん！あたしだけに言うのは違くない!』

なんかやり取りがおかしな方向に進んでないか？ん？私が打ち込む前に話がドンドン逸れていつてるから軌道修正すらまともに行かないんだけど。どうしたらいいの

?

助けてスベ!!! って心のなかで最近コイツのほうが一番ラクなんじゃないかって思うようになった後輩のことに叫び声を心の中で叫んで見る

『……………』

うわあ!! そんなジト目で此方を見るんじゃないよスベペペペペペペエ!!?!?!? お前そういう視線向けてくるんかと心の中のスベがジトーっとした目で此方を見てくる幻覚を見ていれば個人の方に二人から連絡が来る

『あとで話してもらうから』?!!?

なんか飛び火したんだけど?!?! 私まだなんも言っていないのに! 言っていないのに!!! 助けてエアグルーヴ!!! 助けてタマ先輩!!! あ、マルゼンスキー先輩はいいです、貴方の場合トレンディ過ぎて参考にならないので! ハイ

絶対面倒くさいことになるなと思いつつ、表面上はお互いに落ち着いた。内面は大分あれなんだろうけど

『話大分飛んだけど。なんで声かけたの?』

『セルメントがちよいストレス溜め込んでそうだから。軽く出かけようかってアタシが声かけた』

『んで、私がジョーダンに声かけた』

『りよ。んー、あたしも今軽くメンブレ中だから気分転換行ってみるかー……』

というわけでとりあえず3人で外出することが決まった。ヘリオスとパーマーについては、私の方と接点がないから、今回は見送ることにする。なんでか知らんがふたりとも安心した様子だった、なんでだ

『じゃあどこ行く？メンツ的にそういうところ行く流れになりそうだけど』

『あたしはネイルの物かいてー』

『アタシはブティックかな…セルメントは？』

話を振られたけどこれと言ってどこに行きたいわけでも無いんだよねこれが、まあ暇だからついてくっついてという感じのほうが強かったりしないでもないわけだから。どうすっぺ

『私はどこでも良いかなー』

『そーゆーのが一番困るんだぞー』

『まあ。確かに』

うっさいわ、私はそういうのあんまり詳しくないから行くやつに合わせるぐらいしかできないんだけど…まあだいたい合わせるしかなかったって言うべきなのかもしれないんだけど

『二人の行きたいところについてく』

『アタシはそれで良いんだけど…ね?』

『ぶっちゃけつまんなくない?セルメントそういうの興味なさげだし』

『それはそうだけど』

それはそうだけど、まあ私はそれで良いんだよね正直

『お前らが楽しそうにしてればそれでいいんです私は』

なんて送りつけてやるといつもの即レスが若干ラグる、どしたん?なんか落としたり
した?

『……そういうやつだったわセルメント』

『そういうヤツだったね』

なんか呆れられてるけど。まあいっか、とりあえずの待ち合わせ場所を指定してさっ
さと行きますかね

マ子にも衣裳？やかましいわ

シチーとジョーダンと合流後、ブティックとかネイルの店に行って時間をつぶす。ブティックに入れば

「セルメントももうちよいコーデ考えなよ」

なんてことを言われて若干きせかえ人形になった、ジョーダンは笑いつつパシヤツてた。私はおめかしするようなタイプじゃないんだけどね……あんまり顔つき良くないし？

「いや、似合わないでしょそういうの」

「こういうのは似合う似合わないじゃなくて覚えとけてことじゃん？ええと……なんだっけ、あれ。なんていうんだっけ、マナーとかそういうの」

「TPO?」

「そうそれ！」

「ちなみに略称はなんだと思ってる？」

「え？分かんない……とりま、ぼつぷに、おんなのこ？」

「いやそうはならないでしょ……」

ジョーダンのおバカっぷりに思わずツツコミを入れるシチーを拝めたりとか

「セルメントは化粧水とか何使ってるの?ファンデとかはしてないっぼいけど」

「化粧水?使ったことない」

「え、マジ?クリームとかは?かさつかない?」

「それもない、いや自分には使ったこと無いっていうほうが正しいかもしれないけど」

なんてことを言うと二人に信じられないものを見るような目を向けられる、いや必要ないかなて思っただけなんだけど

なんて思っているとジョーダンに両脇抱えられてシチーに取り押さえられる、どうした急に!!

「な、何するんだお前ら!」

「いやちよつと聞き捨てならないこと言われちゃったから」

「流石にそれはナシ」

「な、何をするお前ら!?!?!」

店員の生暖かい視線を受けて冷や汗が噴出する。店の中で騒がせるんじゃないよお前ら!?!等というセルメントの抗議も虚しく奥に連れて行かれてしこたま物を試された

「めっちゃスースーする……」

セルメントがブティックから出てきた第一声がまずそれだ。クリームとやら化粧水

やらをひたすら塗り込まれて挙げ句、きせかえ人形にされたのだから疲れに疲れたのである

「無頓着なのは知ってるけどあれはちよつと…流石に知らなさすぎ」

「同感、もつと女の子らしくしとけ？」

両手にセルメント用に買った、あるいは押し付ける物を下げてる二人が若干冷ややかな視線を見せるとセルメントは明後日の方向を向いて誤魔化す

「次ネイルの店に行く？」

「流石につかれたから休憩しよ？セルメントもそれでいい？」

「うえーい……」

「駄目だこりゃ」

煩いよ二人共、まともにああいうところ行つたのは数回しか無いし、自分のためじゃないから仕方ないじゃんなんて愚痴を言いつつ。カフェに入る

テーブルに突っ伏して二人に適当になんか頼んどいてと告げて休む。まあ軽い軽食（ウマ娘基準）でもあればそれでいいかなって思つてるとジョーダンが話しかけてくる

「ホント大丈夫？ネイル今日行くの辞めにしない？」

「ジョーダンはそれでいいの？」

「流石にテンションダダ下ガリのヤツ連れ回す程空気読めないわけじゃないし」

「さんきゅージョーダン……」

いやマジで疲れたわ、あれなんだろうな。世の中の連れ回される男たちってこういう感じなんだなって思うなどした。私は元々疲れやすい体質ではあったりするのだが

なんて馬鹿なこと思っていると珈琲とBLTサンドを持ってきたシチーが若干呆れ顔で此方を見てくる

「んー、やっぱりセルメントにはこういうの早かった?」

「たぶんねー…早かったと思う」

「語彙力死んでんじゃん、ウケる。やっぱり休ませよ」

ズズズって珈琲飲みながらBLTサンドもきゅもきゅしてると二人からそんな風に言われる。まあコイツラもそこまで無理やりするようなタイプでもないから安心安心

「あ、でもやっぱりあたしネイルのやつ買わないとやばいかも。爪割れちゃってさー……」
「メンブレってそれ?」

「それ」

「それはちゃんと買つときなー……今日はこのまま帰ろうかなって思ってるし」

ぐでつとしながら言う二人は今日は仕方ないかっていう感じになってる。まあ最初のブティックでどつちもストレス発散できたみたいだから大丈夫だろ

「二人共いてらー」

軽く手を振って見送る。ちゃんと見送ったのを静まり返った店内で確認する

「久しぶり、名前の知らないウマ娘さん？」

「よお、邪魔するぜバ、鹿娘」

そう言いつつ、そのウマ娘は私の前にどかつと腰掛ける。コイツが誰なのかはよくわからぬ

分かんないけど

多分、そんじよそこらの霊障ではない。もつとこう…そう、いふなれば存在の格が違う

生霊か？と思ったけどそうではなさそう、そもそもこいつのこと知らんから変には言えないのだが

「まあ、まだ生きてるようであんまり安心した」

神霊といつても過言ではないのだろう。それこそ三女神に匹敵するほどの

どつかで見たこと有るような、そんな感覚は有る。コイツはなんで知らんけど珈琲飲んでるときにしか来ないんだよね。仲良くしてあげてる子に珈琲好きな子は居るけど

その子の名前はマンハッタンカフェ、なんだか霊障とかそういうのに関わりがあるらしく何度か関わってから仲良くなったりしてる。その時になんかお守り貰ったりとか

してたなそういえば。今も持つてる

そういえばコイツもその時からちよくちよく現れるようになった気がする。正確には、鮮明に感じ取れるようになったというべきだろうか？

それとこれとが関係有るのかはちつとも分かんないけど下手に怒らせないほうが良いのはなんとなくだけ分かる。コイツはマジでやばい類のやつだ

んでもってなんで私がコイツ呼ばわりなのかというところ

「前回も前々回も、その前もこの時点でやばかったしなア？」

なんだか知り合いらしいっぽいとか、胡散臭いとか、そういうもんじゃない。名前も知らないのも有るんだけど——

「元氣そうで何よりだケドナ？」

名前を呼んだら最後、私が明確にコイツを認識してしまうかもしれないからだ、そうすると。おそろくだが私は最悪死んでしまうかもしれない。

コイツは存在の格そのものの次元が違う

「……何を知ってるのかはわかんないけれど、とりあえずは元氣だよ」

珈琲に口をつけつつ、口元を隠していると

「嘘はよくないゼ？」

直後に目の前のコイツに声を遮られて思わず舌打ちをしてしまう。他の連中は騙せ

てもコイツだけはどうかヤツても騙せ無いんだい。つつも、内側を見透かされてる感じがすげえ

「ウマソウル、まだ安定してねえんだ口？」

「……まあね」

そう、私のウマソウルは安定してないのだ。なんでかはしらないけど安定してない。本来の髪の色も違ったかもしれないと言われるぐらいには、だから最初は病院に行つてたりしてた。あんまり走ることへの意欲もなかった、そこはまあ。あの人のお陰で良くなつたんだけど

「なあ」

「なんだよ？」

目の前のコイツからかつたるような声を聞きながら珈琲に口をつける。冷めきつた珈琲だが不思議と体を温めてくれるような気がしてくれている

「お前、運命って信じるか？」

まあ、た奇つ怪なことを聞いてくる、そんなもん分かるわけないんだ。ただのウマ娘に。コイツが問いかけてくるそれは単にそういうもん信じるかどうかの話じゃないんだらうさ。いわゆる宿命とかそういうもんだらう

「信じるよ」

そりやそういうのも有るんだらうよ。どうしても変えられない流れつてのは確かにあるんだらうさ。

でも、まあ

「その運命で後輩とかが悲しむなら……抗って見せるよ」

そういうとそのウマ娘は、どこか嬉しそうに笑うのだった

「いい度胸だ、ソウコナくつちやナア？」

クツクツクツつて笑いつつフラッと消える。毎回毎回思うのだがコイツなんなんだろうな。そんなことを思いながら外に出る

「……二人にまた付き合うかあ」

不思議と倦怠感は消え失せていた

黒（猫）は元々幸運だつてそれ

なんてことはない平日のことである。私はふつーにとくに面白くもない授業を受けているのである

「……………」

とてつもなく視線を感じる、言わずもがなスズカからである。まあ、スペのことで色々あったからなんか変に思われてしまったのかもしれない。自業自得では有るが、自立するきっかけになってくれれば良い。というかスペとちゃんとコミュニケーション取れるのか分かんない

「……………えつと、大丈夫？」

「ん？……………多分」

「……………そこそつと近寄ってくるドーベルに、若干目を反らしながら返事をする、まあ大丈夫だろうよきつと。」

「そういうえば、ドベのところのチーフトレーナー体調悪いつて聞いたけどほんと？」

「……………うん」

しょんぼりしながらドーベルが頷く。この人のチーフトレーナーは結構なお年である、トレーナー業は過酷だからとつくに辞めていてもおかしくないだろうけど。まあ人それぞれだから仕方ない

「お見舞いにでも行くか？」

「そうする」

「ドベの姿見ればちよつとは元気になるだろうしね」

「だと、いいけど」

相変わらず自己評価低いなーお前、チーフトレーナーはお前のことめっちゃ可愛がつてくれてるんだからもうちよい自信持てよ

なんてドベと話しているとスズカの視線が若干では有るがまた重くなる。

授業を終えての昼休み

今日は気分転換に屋上にでも行くかな。なんて思っていると

「……………こんにちは」

「ん？……………珍しいね、カフェが此処に居るなんて。」

真つ黒い髪がきれいなカフェがぼーっと一人で空を見上げている。ほとんどあの実験棟で過ごしているはずの彼女が普通の校舎、まして屋上に居るなんて珍しいこともある

「ええ、まあ…色々と有りまして」

「タキオンがまた何かした？」

「どちらかというと『お友達』が……」

「一体何したつていうんだお友達よ……あそこからカフェが避難してくるつてばよっぽどのことだぞ」

「タキオンさんの紅茶をまかしてしまつて……」

「oh……」

状況を説明すると。タキオンがいつもどおりちよつかいをかけてきたから相手をしてやると。暇してた『お友達』がうっかり紅茶をぶちまけてしまつたらしい

ちなみに下手人は逃走中のようだ。何やつてんだお前……

「元はと言えば、タキオンさんが悪いので…とはいえ、紅茶まみれの場所で過ごすのも」
「だから屋上に？」

「はい……」

まあタキオンにはちょうどいい薬になったと思えばいいだろうか。そんなことを思いつつ、持つてきた袋を広げる

「カフェはご飯まだ？」

「ええ、まだですが……」

「んじゃあ、一緒に食べよっか？」

飯に誘うとすんなり受け入れて横にちよこんと座る。今日はめんどくさかったのでサンドイッチを大量に作るだけの簡単なものになったが。まあいっか

もつきゆもつきゆと小さな口で食べているカフェを尻目に、階段を上がってくる気配を感じてそちらに視線を送ると

「あつ……」

スペがやつてきた、ちよつとずつ交流はしてるみたいだけど。やっぱりこういう場所が好きなのかな。なんて思ってる

「……………」

私とカフェを交互に見た後、スススと私の方に寄りつつ。私の体で隠れるようにしつつ、カフェの方を見る。コイツにしては珍しく威嚇したり、露骨に距離を取ったりしないんだな。なんてことを思いながらパンを咀嚼する

「…そちらの方は？後輩の方、でしょうか？」

カフェがスペの方を見たので、肘でスペの脇腹を小突く。挨拶ぐらいは自分からできるようにならないと駄目なんだぞスペ

「スペシャルウィーク、です……」

自分の名前を言った後、また私の影に隠れてしまう。まあ前よりは半分進捗してる

から良いことにしておく

「名前はさつき聞いたとおり、中等部だから後輩だね」

「なるほど……ああ、セルメントさんが面倒を見ていると言っていた方ですか」

カフェが少し考えるように視線をそらした後、自分も自己紹介してなかったことに気づく

「私はマンハッタンカフェと申します。お好きなように呼んでいただければと……」

軽く会釈するカフェにぎこちなく指で会釈し返すスベ。どうやらコイツの中でカフェはちよつとまた違う粋なのかもしれない。

「よつと……」

「んえ……」

いつもどおりスベを膝上に乗せつつ、もつきゆもつきゆとサンドイッチを咀嚼している。時折スベにも食べさせてると、興味深そうにカフェが此方を見ていた。

「スベ、ほれ」

カフェの方にスベを向けつつ、カフェにサンドイッチを渡す。両者ちよつとの間動かずに居ると、カフェが差し出したサンドイッチをスベが視線を交互に向けてからパクつと食べる。もつきゆもつきゆと食べる姿は愛玩動物のそれだ

「……」

カフェも似たような感情を覚えたのか、くすつと笑いつつ。自分からスぺに食べさせる。そんな風景を見てるとくいくつて服をスぺが引つ張ってくる

「ん？」

スぺが手に持っていたのは、ちよつとぶきつちよな形のサンドイッチらしきものだ。どうやら自分の昼飯を自分で作ってみたいらしい。私に食べてみてってことなんだろう
か？

「…んあん」

パクつとスぺから差し出されたのを食べてみる。ちよつとしよっぱい、たまごサンドのようだ。馴れてないけど自分で頑張つて作ったのは伝わってくる。なので

「ん、ちゃんと頑張ったな」

褒めてやるとパタパタつて尻尾を振りながらスぺが喜ぶ。カワイイ奴めくつてうりうりつて撫で回すのにへーつとする、今日もスぺは可愛いなあ。なんて思つてるとカフェの視線がこちらへ飛んでくる

手にはサンドイッチ……なるほど、そういうことか？

「ほれ、カフェもあーん」

「いえ、別にそういうわけでは……」

「あーん」

「…分かり、ました」

ちよつと恥ずかしそうにしつつ。口を開けるカフェにサンドイッチをちぎって放り込む。ムグムグって食べる姿はスペとは違った愛らしさがある。カフェもまた可愛いのだ

そんな食べさせ合いをしていれば腹も膨れて休む時間に

「カフェ、珈琲持つてきてる？」

「はい、勿論……お出ししますね」

「サンキュー」

カフェの珈琲は美味しいので時折飲みに行っている。湯気が立つ珈琲を二人して飲んでると、スペも興味を示したのかスンスンって匂いを嗅いでくる

「スペも飲んでみる？」

興味を示したスペに珈琲を近づけてみると、何回か嗅いだ後にごくつと飲む

「砂糖とミルクを入れたほうが良いと……あ」

「うえ……」

カフェの忠告が遅かったのも有るが、スペが舌を出して苦そうにしている。カフェが砂糖とミルクをちよつと入れてあげると、大分飲みやすくなったのか。ちびちびと飲み始める

なんというか、のんびりした時間であるそんなことを思っていればスペはすやすやお昼寝タイム、腹が膨れれば眠くなるのもやむなしである

カフェと軽く世間話をしてカフェは帰っていった。穏やかな日差しを浴びていると。ぼふつとスペが跨つてすりすり自分の体を擦りつけてくる。

「どうしたすぺぺぺぺぺぺぺぺぺ」

どうしたのかと問いかける前にまたガブガブと噛んでくる、こればかりは馴れようがないのでしようがない。最近は腕ではなく肩の部分をひたすら噛んでくるように変わったのが全くもって分からん。幸い跡には残っていないのが救いみたいなどころがある、そのあとめつちやペロペロしてくる。指を差し出せばそのまま吸い付いてきそうなぐらいである

「相変わらずお前はほんとに……はあ」

ため息はつくもののどうしても突き放す気にもなれない。大事な後輩であることには変わりないの大きいというのと、まあ。なんでか知らないがスペの母親？と電話をする機会があり。よろしく頼まれてるといふことも大きかったりする。

「ちゃんと真っ直ぐ育たないとね、スペ」

私も昼寝すつかー……………

よくわからないが。とあるウマ娘が「先輩後輩の友愛てえてえ」と言いながらぶつ倒れて保健室に送られたらしい

お米食べろ!

「んー……なんか随分止まるな」

郊外をランニング中、妙に赤信号に引つ掛かる。帰りだからまあいいか、なんてことを思いつつ学園へと戻る。

次の日

「ありゃ?またか」

またもや赤信号に引つかかる。今度は連続でだ、微妙に間に合わないのが

さらに次の日

「んー……?」

今日は単に買い出しなのだがまた引つかかった。まあしやーないか、なんて思いつつのんびりと部屋帰る。

なんか最近そういうことが多いんだよねーってカフェに話してみる。するとカフェからは

『どうやら、学園の中で不運を運んできやすいウマ娘が居るようです』

と教えてくれた。ちなみにだがその時カフェはおそらくそこにいるであろう『お友

達』に何かプロレス技をかけていた。バンバンバンって床から音がしてるのでそうなんだろう、え？怖くないのかって？

いや、怖くないよ。だつてカフェの『お友達』なんだから、当たり前では？

そんなことを聞いて今日もランニングに漕ぎ出してみる。もしかしたらそのウマ娘と遭遇するかもしれないからだ。なんてことを思つてると早々に赤信号に引つかかり始めた

「ふむ」

少し考えつつ、辺りを見回して見れば。小さなウマ娘がそこに居た、彼女も此方を見ていたようだ。びっくりしたのかおどおどしてしまっている。まあ私顔つき悪いからちよつと怖いだろうね

見た感じ黒鹿毛……？と思つてみると、あつちの方から近寄ってくる。トレセン学園のジャージ着てるからそういうことなんだろう。中等部……なんかなあ、背ちつさいし？

「あ、あのっ！」

「ん？私でいいの？」

「は、はい」

めちゃくちゃ緊張してるような様子で話しかけてくる推定中等部の子をビビらせすぎないようになるべく優しい声で返事をする。するとちよつと安心したような表情を

「浮かべる、まあ初対面だしな私は

「その、ごめんなさい」

「……………」

なんで謝られたのか分かんなくて首を傾げる。別に目の前の子になんかされたわけじゃないんだけど、気はあんまり強くなさそうな感じがするけど。んー、どうだろ。こういう子って引かないときは絶対に引かないしな

「ライスのせいで、トレーニングの邪魔しちゃって…!」

「んー……………」

ライス? この子の名前か、なるほど。だけどライス? ちゃん? が邪魔したわけじゃないと思うのだが、赤信号だから止まってるだけだし。

「えっと、その…」

「ライス…ちゃん…でいいのかな?」

「う、うん」

「一旦深呼吸しようか」

テンパリ気味だったライスを落ち着かせて、近くにあったベンチに座りながら話をくことにした。このライスシャワーというウマ娘、なんと中等部ではなく高等部である。スペよりちっさいのはびっくりした。失礼だけど

で、例の不運を運んでくるウマ娘はどうやらライスのことらしい。生まれつき不幸なことが周りで起きやすいんだと、さっきの赤信号連発とかそういうの

自分のこと途中どもりながら言うライスに相槌を打って話し終わった時に思ったことは一つだけ

「でも、それってライスのせいなの？」

っていうと本人はめっちゃくちや驚いていたというか。何を言われてるかかわからないっていう風だった。いやそうじゃない？だって別にライスがしようとしてしてることじゃないし

「そ、そう…？ライスの悪い子じゃない…？」

「どこをどう見たらそう見えるの…？」

おずおずって言うってくるライスにさらに首を傾げる。仮にそういう体質があったとして、それを誰かのせいにしたたり、それを悪用してるわけでもないんだし、別に悪い子ではないのでは？

「そっか…ありがとう、セルメントさん」

「どういたしまして…？」

よく分からんが感謝されたみたいだ。まあそんなことは割とどうでもいいか

そんな事を思いつつ、ライスと一緒にトレーニング…ではなく、散歩することに

なった。まあ今日ぐらいはこういう日があつたらいいんじゃないかな

「〜」

鼻歌交じりにライスの手を取りつつ歩く、ちよつと歩くとはぐれそうになるからこうしておくしかない。ちよつとライスは驚いてたけど。素直に着いてきてくれた、良い子である

「せ、セルメントさん」

「んー…？歩調速かった？」

「ううん、そうじゃなくて…えつと。今日はありがとう」

「別にいいよ、ライスと知り合えたし」

ライスは話してみると普通にいい子だった、普通に。引つ込み思案なところはあるけど、ちゃんと会話できるし。変なこと言わないしな

歩いてる途中は結構いろんな話をした。お互いの適正距離はどうなんだろうっていう話のこと、趣味のこと。ライスは絵本が好きらしい、結構可愛い趣味してんなって思う

そうして帰つてるときのことである

「……っ」

ちよつとライスの歩調が崩れる、もしかしてどつかくじいたのかももしれない。ウマ娘

にとつて足つていうのは消耗品でも有るし。生命線でも有る、そしてまだデビュー前つてこともあるので大事にしないとならんのです

「ライス、どう？歩けそう？」

「多分大丈夫だと思っけど……うう」

しょぼんてしつちよつと泣きそうな雰囲気になつてゐる。やめろやめろ、私が虐めてるような気がしてくるんだけど!!とはいうが、ほつとくのもあれなのでライスの前ではしゃがむ

「ほれ」

「えつと……セルメントさん？」

「早くして」

「う、うん」

そのまま歩いたらもつと悪化するかもしれないんだから、しようがないでしょ。そこで悪化したら私の責任にもなるんだし。はよ

「失礼、しまあす……」

ゆつくりとライスが背中に乗つたのを確認すると。ゆつくり立ち上がる、初めての視線の高さにびつくりしたのかライスがしがみついてくるけどまあ気にしない気にしない。

「揺れたりしない?」

「うん、大丈夫」

「それじゃあ、レッツゴー」

「おー……?」

のんびりと学園に戻る、途中信号機に引っかかったけどライスと喋ってたので特に暇になることもなかった。本人は結構気にしてたけど

「ライスと喋る時間が増えたからいいよ」

っていったら特にそこに関しては言うことはなくなった、まあ可愛いしねライスは、もつといっぱい喋りたいのは有るから。話してて楽しいのと、あんまり関わってこなかったベクトルの人だし

そんなこんなしているとライスがやすやすやと寝てしまった。結構トレーニング頑張ってたみたいだし、まあ仕方ないんじゃないかな。寝れる時に寝ておかないとね。そして学園へ到着、美浦寮へと連れて行く。ヒシアマゾン寮長はライスをおぶっている私を見てなんかやれやれ顔だった、なんでだよ。

事情を喋ってライスのお部屋へ、同室の子がもう部屋にいるようなので。その子に預けるだけでいいかな、なんて思ってたかんだだけでも。

「ライスシャワー連れてきたよ」

「分かりました、ありがとうございます……あれ、セルメントさん？」
「おお、ロボロイ。お前の同室だったんだ」

大きめの眼鏡をした奴が出迎える、この子の名前はゼンノロボロイ。伝記とかが好きな文系少女だ、前に図書館で本の整理してる時に。背が足りなくて上手く行つてないところに遭遇して手伝ったことがあつたりする。たまに一人になりたいときは図書館に行つてロボロイと過ごすことも有る

なんとというかこう、お似合いの同室だと思う。どっちも本が好きだし、大人しそうでからな。喧嘩とかもないだろう

「ええとその、ライスさんは夢の中ででしょうか……？」

「まあね、ちよつと疲れちゃつたみたいなんだ。寝かせてあげよつか」

そう言つて、ライスたちのお部屋に入る。やつぱり本がいっぱいだな、なんて思いつつもライスをベッドに寝かせて、軽くくじいた方の足をテーピングしておいてやる。明日ちゃんと保健室に行くようにもロボロイに伝言しといたから大丈夫だろう

そしてそそくさと退散する、あんまり人の部屋に長居するもんじやないしな。遊びに来たわけでもないし、そう思いながらロボロイによろしくと伝えて帰る

なんでか分からないけど、帰つたらフジ寮長にめちやくちや弄られたし。通りすがりのトレンデイから青春ね！と言われたり。エアグルーヴからは呆れられつつ、スズカか

らはなんかまたすごい視線を受けたりした。なんでだよ別にいいじゃんか交友関係広げても

そしてその夜なんでもかライスとロブロイと3人でめちやくちや電話で話した、なだめるの大変だったけど。今度3人で出かけることになった。まあ私は付き添いとか荷物持ちみたいな感じでちよつと遠くから離れてみてようかななんてことをカフエに言ったら。これまた半眼で見られた、今でも納得してないぞカフエ

プライベートは別に決まってるじゃん？何言ってるの？

「くあー……眠い……」

思わず欠伸ばしながら起き上がる。昨日は色々と有りすぎて大変だった。いつも通りスベの相手してたらなんか突然暴走し始めるし、スズカはスズカだし。ついでにフクキタルも煩かった、3割増しにフンギヤロフンギヤロしてたわ。

そういえば一つ言っただけだった気がする。実は前に同期はフクキタル、ドベ、タイキ、パールさん、スズカと言ったな？あれは嘘だ。実はもうひとり居る、そいつの名前はメジロブライト、ドベと同じメジロ家の出身だ。なんで省いてたかという、私はあいつと関わり合いがない、というか持たないようにしてる。だってズブいんだもん、そりが合わないとかじゃなく単純に面倒くさいだけ、あれとスズカが一緒だったらもう無理だね。死んじゃう死んじゃう

というわけで休日だから学園の外へと参る!!面倒くさいこと考えなくて良いね!!出ていく時に背後でエアグルーヴの悲鳴が聞こえたが仕方ない、ごめんねエアグルーヴ。後で一杯掃除していいから、あとちよつとだけだったならアレしていいから。

なんて思いつつ海岸へとやってきたのである

「ふんふー……暇なときは釣りに限る」

………と思つたのだが、どうやら今日は先客がいる様子だ。ウマ娘……ムムム

あの帽子は多分あの子だ。間違いない

「やっほ」

「うわあああああ!?!」

めつちやキヨドリながら危うく竿を離しかけて慌てまくる目の前の子。相変わらずだなあ、なんて思いつつ。クスクスつて笑つてしまふ。

「お、脅かさないうでください:!?僕が人見知りなの知ってるくせに……」

「ごめんごめん。ついね」

帽子のつばを指で引つ張つて恥ずかしそうにしてるのはシユヴァルグラン。通称シユヴァルちゃんだ、私はその時その時の気分で呼んでる。

実はこの子とはトレセンに入る前からの知り合いだったりするのだ。私と出身地が同じなので結構顔見知りになつたりして。クールな性格と間違われてる内気なこの子が大好きですはい

「また居づらくなつた?」

隣に座りつつ、話しかけるとコクつと頷く。この子はまあなんとというか、随分内気なんだ。シユヴァルには姐が居てそっちのほうが所謂パリピなんだとか。あつたこと無

いんだけど、幼馴染の子はオーストラリアにいるからたまにしか電話できなかつたりで。まあ随分寂しい思いをしてそうだなと思ひ声をかけたりしていたのだよ。

トレセンに入ったって知ったのは最近だったから、ちよつと後悔してる。入ってくるって分かれば同室になるつもりだったんだけどなー、この子はからかうじゃないけれど。話してて可愛いのだようん

「あの、えつと……………」

「ゆつくりでいいんだよ?」

「うん……………」

そして所謂陰のものでもあつたりする、話しかけられたりとかされると露骨に挙動不審になつちやうぐらいには。だから、急かさずゆつくり。話して良いんだよって言うと落ち着いてくれるのだ、スペへの対応とかはシユヴァルで学んだようなものなのだ

「……………最近、他の人と仲がいいって聞いて」

「あ……………うん、そだね」

ちよつとじとつとした視線に思わず頬をかいてしまう。この手の子はそういう状況になると自分は後要らないのかなー、もう話しかけれそうにないなーって諦めてまた独りぼつちになつてしまうのだ。そうしないように時折こうして居るのだが、シユヴァルにはそれでも駄目だったみたい

「大丈夫大丈夫、シユヴァルを見捨てたりしないから」

そういうとホツとしたように尻尾を振る、可愛いんだよなあこいつは。

「……………」

それからお互いに何も言わなくなる。シユヴァル的にもあんまり話すの上手じゃないからポンポン話題振るとテンパっちゃうのでそうしないように気をつける

いつもの喧騒とは違う、まったりとした時間。実は私はこの時間が一番好きだったりする

え、スペとかの時間はそうじゃないのかって？

まあ、はつきり言えばそうだったりする。だってあくまでもアレは「トレセン学園の高等部のセルメント」であって「プライベートのセルメント」ではないのだから。

スペは大切な後輩、だけどプライベートにはあんまり干渉してなかったりする。そこは個人の自由というかなんという。

シチーやジョーダン。前にでかけたライスとロブロイとも、大体似たような感覚で接してる。結局の所、自分でどうにかしなきゃいけない問題が立ちふさがるわけで

あくまでもサポート、あくまでも協力者の体を崩すわけにも行かないんだよね。多分私のほうが先に卒業して居なくなっちゃうだろうし。うん

だけどもまあ。目の前にいるこの子はちよつとだけ私の中では違う立ち位置に居るん

だ

他の子は一人で立ち上がれる子だけど、この娘は駄目。誰かがそばに居て引つ張つてあげないとずっとずっと沈んでいってしまう、そんな感じがしてしまう

だから、こうやってちゃんと会いに行つてるようにしてるんだよね。

そうしてると、ちょこんと肩に引つ付けてくる。寂しんぼだもんねシユヴァルは、そう思いつつ肩を抱いてあげると。心底安心したような表情を浮かべてくれる。可愛い

「……」

鼻歌交じりに背中をトントンってしてあげると、うつらうつらとしてくる。ちゃんと寝れてるのか心配だ、と思つてるとそのまま膝上に寝つ転がられる。

そのまましばらくやすやすと寝てしまったシユヴァルが目を覚ますと跳ね起きてめちゃくちゃ挙動不審に、落ち着いてつてばシユヴァル。気にしないから

「(ぎ)ぎ(ぎ)めんなさい……」

「良いって良いって」

両手で帽子を押さえながら謝ってくるシユヴァルにこれ以上気後れさせないような声で話しかける、とにかく刺激しちゃ駄目なんだ

「なんでもう……うう……」

自分が睡魔に負けてしまったことに項垂れている様子だ、でもこれでもまだいいほう

なのである。本来なら帰りたい帰りたいって連呼してるような娘なのだから

「でも、ちよつとは寝れたでしょ?」

「……うん」

「なら良かった」

そうこうしていると太陽が頭上に差し掛かる、ちよど昼頃だ。シュヴァルがもうちよつとだけ一緒に居たそうにしたのでそうしてあげる

「じゃあ、うちに行こっか」

「え?」

「早く早く」

「えっ、えええっ?!?!」

驚きに驚いてるシュヴァルの手を引つ張つて自分のうち……とは言うもののただの私が借りてるアパートなんだよね

「上がって」

「お、お邪魔します……」

シュヴァルの手を引いて部屋に入り、腰掛けさせる

「またお姉さんから電話きた?」

そう言うのとビクツとしつつ頷いて項垂れる。まあ家族から色々と言われやすいのは

有るんだらうね、心配とかもあるんだらうけど

「……僕なんか……あう」

自虐に走りそうになるのを見ればぼぼふって帽子の上から優しく撫でてあげる、大丈夫だよシユヴァル。まだまだこれからなんだからさ

「思うところはあると思うけど、此処に居る間は考えない。いい？できそう？」

そう言うとう目を泳がせた後なんとか頷いてくれる、良い子だ。

その後台所に立って料理する、ちよくちよくアパートの方にも来るので食材は有るのだ。しばらくしてるとくいくってシユヴァルがいつの間にか背後に居る。寂しんぼめ

シユヴァルの好きにさせた後、一緒に御飯を食べた。遠慮がちにしてたけど。一緒に食べると仲良しみたいだねって言うのと蒸せこんで大変だったりした

お昼が過ぎればそのままアパートで過ごす、気分転換になるかはよくわからないけど。シユヴァルがそうしたいと言ったのでそうしておく。

この娘、父親がすごい野球選手なので。それなりに野球に詳しかったりする、前はキャッチボールとかしてただ今だけの身体能力だと危ないだらうからヤツてない

「……………んう」

一緒に居るとはいつでも、好きなこととして過ごすかな。って言うはずがシユヴァルに構ってばっかりになる、本とかテレビ見ると袖引っ張ってくるし。ウマホ弄つてると

視界に入ろうとしてくる。

まあ、なので脇に腕通しつつ抱っこが定位置になってる。こうするととつても安心したような表情をしながら笑ってくれるのだ、大変愛らしいと思います

そんな時にウマホが鳴る、エアグルーヴからだ。シュヴァル乗せながら電話に出る

『どうしたエアグルーヴ』

『今、手が開いてるか?少し問題が——ええい大人しくしていろ!』

エアグルーヴが喋ってる最中に怒号が聞こえる、それを聞いてシュヴァルがびっくりしたのか丸まって若干怯えている。私はそれを見て割と不機嫌に

『ああ、すまない……ええとだな。お前の同期が問題を起こしてな……後始末に協力してくれないかという連絡だ』

アイツら……やはりバカ集団の集まりというかストツパーらしいストツパーが居ないんだよね。思わずため息をついてしまう

『連絡するつてばよっぽど?』

『まあ、な……』

随分菌切れ悪いなエアグルーヴ、これはどうしたもんかな。エアグルーヴが此処まで言い切らないのは大分珍しい

そう思っていると、シュヴァルがいくいくと袖を引っ張りつつ。ボソボソって言い始

める

「僕のこととは、気にしないで……その、同期の人？困ってると思うから……助けてあげて、僕は大丈夫……だし」

帽子のつばを下げながら途切れ途切れに言葉を言うシユヴァル

『んー、エアグルーヴ。今回はパス』

シユヴァルが顔を上げてぎよつとした顔をする、同期とか生徒会より自分を優先するということが想像つかなかつたらしい

『まあ、それも仕方ないか……そういうえば、今は外か？』

『そだよ』

『そうか、なら今日は戻ってこないほうが良い。巻き込まれてしまうからな、寮長には外泊すると私から伝えておこう』

『ありがと……ちよつとまって』

一旦ウマホを遠ざけるとシユヴァルの方を向く

「シユヴァル、どうする？今日泊まってく？」

「えっ……」

動揺しすぎて目が回っているシユヴァルは数秒考えた後に……コクリと頷いた

『悪いんだけど。もうひとり外泊許可取れる？』

『ん?ああ、大丈夫だが』

『シユヴァルグランって子もよろしく…これは内緒でね』

『了解した…それにしても、毎日これを捌いていたのか』

『まあね』

『……うむ、やはり今日は此方の事は考えずに羽根を伸ばすと良い』

『ありがと、じゃあね』

『またな』

エアグルーヴとの会話を終えると、気まずそうなシユヴァルが此方を見ている。まあ気にするなつてシユヴァル

「僕のことなんて、ほつといってくれても…あうつ」

またネガティブな方向に走りそうになつたので今度はほつぺたをふにふにつて突つ
つく

「私はシユヴァルと一緒に居たいんだけどなー?なー?んー?シユヴァルはそうじゃな
いのかなー?私は寂しいぞー???'」

「うう…」

素直な好意をぶつけまくとシユヴァルは顔を赤くして降参しましたというように
私の胸に飛び込んできてぎゅつと抱きついてくる。よしよし

「私はシユヴァルのこと好きだからなー」

なんていうと遠慮がちにしてしてしと尻尾で叩いてくる。プライベートな面でだと私
はあんまり交友関係広くないんだぞー？

「……いつも、ありがとう。セルメントさん」

「ん、シユヴァルの可愛い顔が見られれば私は十分なのです」

「ほんとに、そういうところ……っ」

ほかほか叩いてくる姿も大変可愛らしいと思いますはい、ウマ娘、というかトレセン
に居る奴は大体キャラが濃すぎるから、シユヴァルみたいなのはほんとに癒やしなんだ
よねえ……かわよ……

お泊りさせるときはちゃんと服を用意しとけ

「とういわけで今日は泊まっていつてねー」

「う、うん」

ゆつくりと抱っこしながらゆらゆらと体を揺らす、シユヴァルはこうされるのが好きだったよなー、なんて思いつつしてあげる

「なにか寮に取りに行くものとかある？」

そういうとシユヴァルが持つてきてたカバンの中身を漁る、持ち物はウマホとお財布だけだった、あとは玄関に置いてる釣り竿かな

「……特に何も……あ、でも着替え」

そういえばそうだったわ、泊まるんだからそういうのも用意しとかないと。しまった、シユヴァル泊まらせる想定してなかったわ畜生、失態だわ

「んー……今から買いに行っても良いんだけどなあ」

だけどシユヴァルとイチヤイチャしてたいので外には出たくない。というかアイツラとエンカウントする可能性が無きにしも有らずの時点で却下なのだよ

「まあいいや、私の服着せればいいでしょ」

そう言うとシユヴァルが吹き出した、吹き出した。え、マジ？吹き出すぐらい嫌だった？ちよつとセルメント横になりますね…………

「僕は、それでも…大丈夫です」

ごめんよシユヴァル、できれば新品のを着せてあげたいんだけど私ので我慢してくださいあ…………

そんなこんなで3時になったからホットケーキミックスがあつたからパンケーキを作った。メープルシロップがなかったのが痛手だけどシユヴァルは気にせず小さい口でもぐもぐしてた、軽く尻尾振つてるから不味くはないんだろう、良かった良かった

そう思いつつおやつが終わつたのでうたた寝タイム、すやすやと眠りに落ちる

そんなセルメントをじつと黙ってシユヴァルグランは眺める

そして寝ているセルメントを尻目に過去をふと思い出す

「あの時も、こんな感じだったなあ」

——僕には、姉がいる。活発な姉だ、僕なんかとは違う世界にいる。そんな人

——僕には、凄いいお父さんがいる。ヒトミミのスポーツは廃れている、と言われている。盛り上がることも有る、海外で成果を出して認められたすごい人

——だけど、僕はそうじゃない。他の皆よりも足は早くないし。どうしても姉の影が

ちらついてしまう、そんな心の弱さが嫌いだけれど。治すことも出来ない

今日もため息をつく、居心地が悪い学校から帰って。あんまり家に居たくなくてよく釣りに出かけて気を紛らわしていた。

釣れる釣れないとかはどうでもいい、ただただ逃げたくてそうしてるだけ。そして憧れた

ただただ泳ぎ回ってる魚に。何かに一生懸命になってる人達を。そして憧れるけど諦めてしまう、どうやったって僕は日陰だ。日向に居るような、居て良いようなやつじゃない。そんなことは分かってる

でも、そんな僕にも。気にかけてくれる人はいる

『やつほーシューちゃん』

釣りをしていると背中から声をかけてくれる人がその人だ、名前はセルメントさん。独りぼっちでいた僕に話しかけてくれて。こうやって時々様子を見に来てくれる人

『こん、にちは』

『はーいこんにちは。駄目だぞー？あんまり独りでいると』

椅子に腰掛けてた僕の隣に肩を触れさせながら頬を突っついてくる、僕がどれだけネガティブなことを言っても側に居てくれる人。

『シューちゃんはシューちゃんだよ、お姉さんにはなれないしならなくていいよ。キミ

はキミなんだからさ』

そんな風に劣等感の塊みたいな僕に怒るわけでもなく、変わろうと促すわけでもなく。そのまま受け入れてくれる。なんというか……うん、優しい人だ

会話が持たないことが苦痛になる僕だけど、セルメントさんと一緒のときは特になんとも思わない。時間を共有してる、そんな感じがする

うっかり僕がちよつと寝ちやつたときは。ぎゅつと抱きしめて寝かせてくれたりしてた。恥ずかしかつたけど、嬉しかつた

でも、そんな日も長くは続かない

セルメントさんがトレセン学園に合格したことは、僕も知っていたし。そうだろうなって思っていた、あの人は日向に居るような人だから。僕みたいな日陰に居るような人とは違う

『ふん、ふん……』

以前と同じ様に二人で居ると

『はい、シューちゃんにあげる』

そういつて手渡してきたのは。セルメントさんと思わしき、いわゆるぱかプチと言われているものだ。自作したのかな？

『私がトレセン学園に行くことは知ってるよね？』

『……………うん』

思わず項垂れる、また独りぼっちになるのかな。なんてことも思ってしまう

『だから、それあげる。私は多分しばらく会ってあげられないだろうし。もしかしたら、もう会えないかもしれないし』

私は居なくなっちゃうけど、私って言う人はシユヴァルグランというウマ娘を忘れな
いから。だから僕にもセルメントというウマ娘を忘れないで欲しい。と

嬉しかった、僕のことそんなに気にしてくれてる人が居たことに。あとは、セルメン
トさんは隠してるつもりなんだろうけど、所々指に跡が残ってる。頑張って作ってくれ
たんだろうってというのが伝わってくる

『シユーちゃん』

『……………?』

そろそろ帰らなきやいけない時になり、多分コレが最後なんだろうなって思いながら
声をかけて振り向く

『私はシユーちゃんのこと忘れないで置くから、シユーちゃんもわたしのこと忘れない
でね?あと……………無理しちゃだめだよ?』

セルメントさんの口癖だ、無理はしないでっていうのは。それを聞いて頷くと、最後
に軽く抱きしめて名残惜しそうにしつつ去っていく

そうやって、僕とセルメントさんの関係は終わった

——なんて当時は思ってた

だけど、僕の体は僕が思っていた以上に動けたみたいで。僕もトレセン学園へ入れることになった。正直怖かったけれど、セルメントさんに会いたかったから

……だけど、勇気が出せなかった。ほんとに覚えてくれているか分からなかったし。あとなんだか前のセルメントさんとは違う雰囲気だったのも有る

そう思っていたのは僕だけだったのは最近だった、たまたま人通りがすくないばしょで再会したんだ

『んー……？』

僕のことをじーっと見てくるセルメントさんに思わず飛び腰になってしまふ。もしかしたら覚えてなくて変なやつだと思われちゃったかもしれない、そうだったら多分僕は耐えられない

『んー……』

再度僕の事を見つつ首を傾げたセルメントさんにとうとう逃げ出したくなってしま
う。うう……なにか言ってくださいよ……

『シューちゃん、こんなに可愛かったっけ?』

『えっ?』

思わず声が漏れてしまふ、忘れてて誰だか思い出そうといしてるんじゃない? そんな
ことで頭がいっぱいだった僕を見つつセルメントはクスクスって笑う

『んー? シューちゃんは私が忘れてると思ってたのかなー?』

『あうあうあうあう』

ほっぺた突つつかないでください、そんな願いも通じるわけもなくされるがままに
なっている

『忘れるわけじゃないでしょ? 《キミ》は私の友達なんだからさ』

そう言われたのを、多分僕はずっと覚えてるんだろう。そんなことを思い出している
と、僕も眠くなって寝てしまふ

おやすみなさい、セルメントさん……

あー…ちよつと寝すぎたかも、なんて思いつつ体を起こそうとすると。シュヴァルが上に乗つかつて寝ていた、寂しんぼは相変わらずだなあ。なんて思いつつゆつくりと抱き起こしてご飯作ろうとするとがっしり掴まれていたことにも気づく

「シュヴァル？」

少しでも引き剥がそうとするとやだやだつていう風に体揺すつてきて離れてくれない。こりやあスベ以上に甘えん坊だ、前から知つてたけど

起きないものは起きないので、もう一回横になる。無理やり起こすのも良くないし、なんだかしあわせそうだしな

トントンって背中を撫でながら適当にウマホを弄つてると、シュヴァルがモゾモゾつて動く。स्पेमみたいにとぅとぅ嘔み付いてくるのか？なんて思つてると

ぼふっ

肩に顔を乗せつつ全身でぎゅうぎゅうって抱きついてくる、可愛かよ。撫で回せばくすぐったそうにしてる

思う存分構い倒してれば、そのうちシュヴァルが目を覚ましてお顔真っ赤で恥ずかしそうにしてるけど逃さないにんなら寝てるときよりももつと激しく構い倒す。こうすると逃げることを放棄するのだからにやる

いちやついてるともう日が落ちる頃になつてた

夜はコレといってやれることもなかったのでご飯食べて一緒にお風呂入った。何回か一緒に入った事あったはずんだけどシユヴァルはなんだか恥ずかしそうだった

そしてお風呂上がった私の服を着せた、ちよつと大きかったのかだぼつとしちやつてるけどいいかな？パジャマが萌え袖とかしたのは別に狙ったわけではないですはい

「髪乾かすよー」

「ん……」

膝上に乗つけてドライヤーを当てていく、耳の部分は敏感なのであんまり当てないよ
うにしつつ。手櫛で梳かすこの時点で大分うとうとしちやつてたので、今日は早めに寝
るかなと思つた

案の定髪を乾かす頃にはシユヴァルはすやすやと寝てしまつていた。寝る前のお風呂
呂だったのでも問題はなかったのでそのまま一緒にベッドに潜り込んで寝かしつける

「おやすみ、シユヴァル」

そういうと私も寝る。じゃないと色々と不味いと思つたので寝る、別にシユヴァルの
頬を撫でてたら指に吸い付いていたので危なくなつたとかそういうのではない

幕間 生徒会のお手伝いさん

「ふう……………」

生徒会室にため息がこぼれ落ちる。ため息をこぼしたのは副会長であるエアグルーヴだ、今日も今日とて厄介事が数多く寄せられるのが生徒会である。生徒間のいざこざの仲裁やら、事務手続きやらで大忙しである。無論巡回していればトラブルに立ち会うことも有るので気の休まる時間というのは無いに等しいのだ

「さて、なんとかするしかない……………ん？」

積みもりに積もった書類に手をかけようとした時、ドアがノックされた。入室を促すと、見知らぬウマ娘がやってくる……………確か……………ああ、セルメント。と言ったか

「職務中失礼いたします、副会長。資料の方を提出致します」

「すまない、助かる」

落ち着いた表情で書類の束を机の上に置かれる。不備がないかチェックするのは骨が折れるが、仕方が有るまい。仕事なのだからな…そう思っていると

「書類の方は確認済みです。記入漏れ、表記の誤り、抜けが有るものは此方である程度弾き。突き返しているので目を通していただくだけで問題ないかと」

と言われる、ふむ………そうしてもらえるのは非常に助かる。仕事が一部だがぐっと減るのは事実だ………ん？

「その言い方だと、他の生徒の物も……？」

「私の方である程度確認を。要らぬ気遣いではあるとは思われますが、無駄な時間を使わせてしまうわけにも行きませぬので」

僭越ながら言いつつセルメントが話す、今日を通す限り特に問題はない。弾いた書類の枚数と弾かれた人物も分かりやすくリスト化されている……何故か一枚白紙の紙も印刷されているが。

「そちらの方はもしお気に召されたのであれば。刷れるように作成しておきました」

とセルメントが此方が尋ねる前に補足をしてくれる……なかなか優秀だ。皆がこう出来るわけがないのは重々承知では有るが。求めてしまうのが性というものだ

「私は此れで失礼させていただきます。万が一精査して不備があった場合は連絡を頂けると幸いです。では」

そういうと直ぐにセルメントは此方に一礼して部屋から出ていく。これで少しは楽ができるといいが

その後リストは印刷されて各方面に配布されることになった、優秀な物は使い回すに限る

———？———
忙しきで時が経つのも忘れたある日、私は不覚にも起床時刻を大幅に遅れる失態を晒していた。門限までには時間が有る、だが生徒会の仕事があることを考えればあまりにも足りない。

焦燥に身を包んで生徒会室に入る、そこで待ち受けていたのは

「おはよう御座います副会長、お疲れの様ですね」

何故か生徒会の仕事をしているセルメントの姿だった、判子が必要なものは寄せており。確認だけでいいものは処理済みの棚へ。不備があるものは付箋とファイリングが施されていてとてもわかり易い

「あ、ああ……自分でも根を詰めているのを自覚していなかったようだ……いや、そうではなくだな」

「まずは、手を動かして終わらせてしましましょうか」

「…：そう、だな。そうしよう」

尋ねる前にセルメントに促されて隣に座りつつ流れ作業で書類を処理してく。此方のペースを鑑みて流してくれているのでやりやすい。私でしか処理できないものをやっている最中は別のことをしているようだ

書類が片付いた時刻は普段私がやっている時刻よりも随分と速いことを時計の針が

示していた。間に合わなくなるかと一時は焦ったが、なんとかなったな。そう思っているとセルメントは寄せていた書類を片手に退室するところだった。

「此方は私が突き返しておきますので」

「あ、ああ……」

「では、失礼いたします副会長」

そう言うのと直ぐに行ってしまった。取り付く島もないというよりは、此方のことを鑑みてくれたという方が正しいような気がする、そう思いつつ後で礼でも言わないとな。等と一人心地にそう思った

そんな風にちよくちよくセルメントが生徒会の仕事の手伝いに来てくれるようになった、とは言うが。会長やブライアンが居るタイミングではなく。私が一人で仕事をしているときだけだが…単にタイミングが悪いのだろう。負担が減つてある程度まとまった時間も取れたりするようになるのは感謝しか無い。

そんな慌ただしい毎日が過ぎていくある日

「……………」

花壇の手入れが終わり、生徒会室に戻ろうとすれば。セルメントが一人で日光浴…というよりは単に寝てしまっているのを見つける。

「セルメント?」

声をかけても反応はない。どうやら居眠りではなく本当に寝入ってしまったようだ……ただ、このままにしておくのはどうなのだろうかとも思う、放課後故寝入ってしまったては門限もすぎる。夜になればある程度冷え込むこの季節に放置は良くないだろう……となるとどうするべきか

「ふむ」

保健室は無しだ、特に衰弱しているわけでもない。寮は……同室があればはゆつくり休めるとは言えない。無論私の方もだ。となるとどうするべきか、やはり生徒会室に行くしか無い

「……失礼する」

聞こえるわけではないが一応断りを入れてから背負って生徒会室に赴く。誰かに見られれば要らぬ噂も立つので注意しつつ……今日は会長は別件で出払っている。ブライアンは……何をしているのか分からん。今はそれはいいか

「……………」

吐息を立てながら寝ているセルメントを横にして書類を片付けていく、しばらくすると。セルメントが緩く起き上がる、普段の彼女からは考えられない気の抜けた表情だ。疲れているのだろうか……

「おはよう……?」

声をかけてみるが夢見心地なのかうつらうつらと寝ぼけている。半分ほどしか意識が覚醒していないのか返事らしい返事もない。他の者が相手であれば厳しい態度を取るのだろうか、相手が相手だ。流石に酷だろう

短くない時間微睡んでいると

「……む」

此方へと体を預けてくる、まだ寝たりない様子だ。まあ、寝かせておいてやる方がいいだろう、これも先日の借りを返す、ということも兼ねてな。

規則正しい吐息を立てながら眠っているセルメントは猫のように体を丸くしている、落ち着いてくれているようで。特に寝返りも打つこともない、寝相が悪くない様子なので助かる

そこからしばらく紙の擦れる音とセルメントの寝息だけが部屋にこだまする、まあ存外悪い時間でもないか…

「……んん」

大方仕事も終わったところでセルメントが起き上がろうとする、だがうまく体を起こせないようなのでそのままにさせておく。

「…もう少し休息を取る方がいい。いいな?」

そういうとセルメントは頷く代わりにそのまままた眠りにつく。雰囲気も普段と大きく変わっておとなしい、というよりは素直な雰囲気だ。言われたことは大人しく聞く物分かりの良い子なのだろう

そしてそろそろ帰る時間になる頃になっても起きる気配もなかった。仕方ない、寮へ送り届けてやるとしようか

午前中のヘイ彼女!、午後の自由人は流石にキツイんだけど???

ふあー……休日も終わって学校だわ、シユヴァルとのんびり休日を終えての月曜日はとつても憂鬱である、帰ってきたらエアグルーヴが死にかけてたのでファイン殿下に預けて馬鹿どもをしばき倒してダートに埋めてきた。自業自得だから

久しぶりにアパートからの登校だからのんびり行くかな……なんて思っていると視界の橋に住所が特定されるような高級車がアパートのまえに止まってるんだけど。行かなきゃだめ?行かなきゃだめ?そっかあ……

「おはようございまーす……」

「おはよう!朝だからテンションアゲアゲでいかないと!」

スーパーカーことマルゼンスキー先輩である。あの、ただのアパートの前にそういう車止められると非常に困るんですね。ヒソヒソされるんですね、大変困ります。一回冗談かどうかかわかんないけどマルゼンスキー先輩のマンションに出来ないか的なこと言われたけど……先輩のご自宅であれですね。カウンタック格納できるマンションですよね?めちやくちやセキュリティ嚴重ですね?前に遊びに行つたときに網膜認識

とかありましたよね…あれ？しれつと私、生体認識取られたのか？…こ、こわひ

「隣、乗ってく？」

「あ、はい」

すぐごと隣の席に座る。カウンタックはカウンタックでも。多分これウルフだよな…：めっちゃ高いやつ。これお父さんのお下がりらしいけど。数十億するってことだよなこれ…そもそもカウンタック自体現存数が少ないんだし

なんてことを思っていると発進する。マルゼンスキー先輩スピード狂いらしいけど私はそれに遭遇したこと無いんだよね。なんでだろう、流石に学園に行くまでには飛ばさないことが多いんだろうか。よくたづなさんが犠牲になっっていることがあるらしいんだけどね。

「気分の切り替え、できた？」

「あ、はい…：ん？どうして知ってるんです？」

「釣り道具持ってたの、見かけたから気分転換にでも行ったのかなって思ったのよ」

「そうでしたか…：とりあえずリフレッシュできましたよ」

「それなら良かったわ、セルメントちゃん。頑張り屋さんだから」

そんなことはないと思うんですがね。スズカ以外に関してはあるに何もしてない気がするし、客観的に見たらそんなこと無いのかもしれないけれどね

「というわけで正門近くで降ろしてもらおう。というわけで登校……って思ったんだけど今日はトレーニングメインの日だからどうしようかな。そういえばマルゼン先輩は暇なんだろうか」

「そうだ、マルゼン先輩。今日時間ありますか?トレーニングの指導してほしいんですけど」

「わかったわ、じゃあグラウンドでね?」

「よろしくおねがいします」

——?——

というわけでトレーニング指導してもらった、まあフォームの出来とかそういうのは比較にならないので足運びとか色々と勉強させてもらった。相変わらずはえーなーと思いつつ並走と呼んでもいいのかわからんのをやっていく

「お疲れ様、水分補給は忘れずにね?」

「ありがとうございます……」

へろへろになっているとスポーツドリンクを手渡されてちびちび飲み始める。筋肉痛はないのでアイシングはとりあえずしない、あれは一時的に痛みを抑えるためにやるから。実は今みたいに足が痛くないときにやると逆効果だったりする

「ねえ、セルメントちゃん」

「…どしました？」

なんかいつもと雰囲気違うマルゼン先輩に首を傾げる。バブリーな雰囲気がないというか、なんとというか。ちよつと調子狂うのだ。

「セルメントちゃんは、その…ね？どうして私とたまにだけドレーニングしたがるのかしら？」

「特段、理由はないですよ？ただまあ…あれですかね。なんとなくか、落ち着くので」
本心ではある、マルゼン先輩は大人つていうか、こう。余裕がある、最初はめっちゃくちゃ気を使つてただけ。そうするとしょんぼりしてしまうのである程度くだけた話し方をするようにしている。

「単純にマルゼン先輩とドレーニングするのが楽しいつていうのもあるんですけど」

この人、走るとまあ楽しそうに走るんだよね。それを見るのは私は好きだったりする、勝ち負けは当然ある世界だから甘いといえは甘いんだけどさ。それはそれ此れは此れなんだよね

「……そっか」

なんだかトレンディな雰囲気なつてきたぞ。こういうのはきははずかしいからあんまりやりたくないんだよね……つて思つてるとなんか知らんが撫でられた。マルゼン

先輩好きなんだろうか、撫でるの。とりあえず甘んじて受けておこうかな。

午前中のトレーニングはこれでおしまい。午後はマルゼン先輩もなんか予定あるらしいのでここでお別れ。また後で並走でも頼むかな、ほとんど並走の体を取れてないだけ。相手がスパーカー故致しかたない

んで午後のトレーニングはどうすっかなと思っていたんだけど

「うん、此れがいいかな?」

——— どういうわけかシービー先輩に拉致られている。どういうわけかかはまったくもって不明である。この人不意に現れては連れ回してくるのでちよつとエンカウント率下げたいんだけどこういうときだとほぼほぼエンカウントする、強制エンカじゃないだけましといえそうなんだけども。朝のマルゼン先輩みたいに

「ねえ、セルメントは此処でいい?」

「ん、いいですよ」

というのも近くに新しいラーメン屋ができたので下見に来たのである、シービー先輩がね。カツラギエース先輩が此方に両手を合わせて謝ってきてたけど。別に問題ないですよって手を振り返えしたらなんかずるずるってシービー先輩に引きずられて今に至る。カツラギエース先輩も大変だよな…ちよつとあの人には親近感湧くんだよね。お世話係という意味合いでだけ

「やっぱり混んでるね」

「新しくできたばかりですからね」

そんな事を言いつつ並びながら待っている。シービー先輩めちやくちや目立つのとなりにいる私にもちよつとだけ視線が来るけど気にしない気にしない。多分シービー先輩の隣りにいるから視線を向けられてるだけなんだから。

「そういえばマルゼンとトレーニングしてたらしいね?」

「まあ、はい」

情報流れるの早くない?というか私が誰とトレーニングしてるかっていう情報……いる……???需要ないでしょうどう考えても。物好きなのやつもいるもんだなあ、なんてことを思いつつ返事した

「じゃあ今度はアタシと一緒に頑張ろっか?」

なして? なして!?! 心の中のスベの言葉が移る、あいつ実は方言使うらしいんだけど無理して標準語に直してららしい、それはそれで愛嬌としていいと思うんだけどそれ言うとおそらくキレられそうだから言っつてない。

「マルゼンと一緒にしたんだよね?」

「はい」

「じゃあ次はアタシじゃない?」

「ええ…?」

たぶん今の私の顔は宇宙猫になってると思う。話の流れが一切わからないからである。まあトレーニング相手がいらないからいいんだけどさ。でもシービー先輩ほどのウマ娘のトレーニング相手が私だとねえ…いやマルゼン先輩のトレーニング相手としてもクソ雑魚もいいところなだけで。言ってる悲しくなってきたわ…

「マルゼンとはしてアタシとはしないんだ…ふーん?」

な、なんですかそのジト目は。まるで浮気相手を見るような視線はやめてくれませんかね!?ただトレーニング一緒にやっただけというか。そもそもウマ娘同士では?というへんてこな考えをしているとなんか視線が余計に重くなったのでややくそになるしかねえ!!

「わ、わかりました。やりますよトレーニング!」

「よし、これで午後の予定決まりつと。ルドルフに小言言われなくて済むよ」

「……小言?」

「あー……まあ、色々ね。ほら、後輩の育成とかさういうの」

「あー……」

シービー先輩、多分感覚派だろうからさういうの苦手そうだしな。かと言ってそれ理由にのらりくらりやってると会長にお小言言われるから形としてだけでもヤツてま

すよオーラを出すと。なるほどなあ、いや私追い込みじゃないから真似できないんだけど。マルゼン先輩？あれはもう先行でも逃げでもなくマルゼンスキーという走り方だからね、しようがないね

「それじゃ、軽く済ませて行こうか」

……トレーニング前にラーメンなのかそうなる?!? そう思ったけど今更なので抑えつつ食べようとしたんだけど。遠慮しなくていいと言われていっぱい食べさせられました。午後のトレーニング死んだなこれ……

——?——

「前より大分形になってきたんじゃない?」

「コテンパンにしてから言いますそれ……??」

ええまあはい。ボッコボコにされました。経験値はたくさんはいるんだけどそうじゃないって言いたいやつだね此れ。パワーレベリングとすら言えないよ、だって私が追いつけないんだもん。ぐすん

「でも。ちゃんと一緒に並走してくれたよね?」

「時間割いてもらってますからね……」

そう言いつつマツサージをする、筋肉ほぐしておかないと明日大変なことになるからなあ。なんて思っていれば背中をグーツとおしてもらおう。この人自由人だからこうい

う事するかと言われれば珍しい気もする。まあ気まぐれだからしょうがないな

「はー、たまにしつかり動くと気分がいいね」

「そうですね：いや毎日やったほうがいいんですけど」

「気分が乗らないとやる気起きないでしょ?」

「それはそうですね」

そんな事を言いつつ片付けして、お互いに着替えてグーツと背伸びする。ふふいー、
疲れるわやっぱり。自分ひとりでやるのより効率が言い分負荷はそれなりに掛かるか
らね。そこはしようがないものとしておこう。

トレーニング終わったので解散、シービー先輩はなんか散歩してくるってふらーつと
またどっか行つてた。その後なんか先生がシービー先輩探してたので聞いたらどうや
ら授業出席数がちよつと怪しかったらしい、それを後輩の指導でちよつと大目に見るつ
ていう約束だったらしいんだけど報告しないままだったそうだ。まあ私が指導しても
らいましたよと色々と話したら納得してくれたっぽい。トレーニングしてもらったか
ら此れぐらいはまあ。いいかな

放課後は何をしますかねえ